The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ パウル・ハッカー著『現代ヒンディー語における若干の助動詞の機能について』（上）
Author(s)	Hacker, Paul; 溝上, 富夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1972, 26, p. 31-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パウル・ハッカー著『現代ヒンディー語における若干の助動詞の機能について』（上）

溝　上　富　夫（訳註）

PAUL HACKER: Zur Funktion einiger Hilfsverben im modernen Hindi (1)

übersetzt und erläutert von **Tomio MIZOKAMI**

Dieses Referat ist die Übersetzung der Abhandlung „Zur Funktion einiger Hilfsverben im modernen Hindi" von Dr. Paul Hacker, wohlbekannter Indologist und zur Zeit Professor an der Universität Münster.

Diese im Jahre 1958 geschriebene Abhandlung wurde herausgegeben von dem VERLAG DER AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN UND DER LITERATUR IN MAINZ. Diese Abhandlung besteht aus XIII Kapiteln und 92 Seiten, und behandelt hauptsächlich zehn Hilfsverben, d. h. *denā, lenā, jānā, ānā, paṛnā, uṭhnā, ḍālnā, baiṭhnā, calnā, pānā.* (Die Leser werden gebeten zu beachten, daß ich den Text in zwei Teile teilend übersetzen mußte, da der Raum für diesen Artikel beschränkt ist. Die Teile von VI. bis XIII. werden in der nächsten Nummer erscheinen. Bibliographie wird auch in der nächsten Nummer herausgegeben werden.)

Hilfsverben im Hindi sind sehr mannigfach, kompliziert, und schwer zu fassen; deshalb waren viele Punkte nicht aufzuklären. Die Funktionen solcher schwierigen Hilfsverben hat man als „Intensiva" klassifiziert, und viele Grammatiken scheinen dieser Angabe blind gefolgt zu sein.

Der Verfasser aber warf viele Fragen darüber auf, untersuchte und analysierte die Funktionen der acht Hilfsverben sehr ausführlich, die man als „Intensiva" klassifiziert hatte, und äußerte seine eigene Auffassung. Sie ist sehr merkwürdig und sollte von den heutigen Wissenschaftlern des Hindi angenommen werden. Darum ist es notwendig für alle Lehrer und Schüler dieser Sprache, sei es Indier, Europäer oder Japaner, diese Abhandlung zu lesen.

Ich habe diese Abhandlung ins Japanische übersetzt und einige Stellen des Textes auf

Japanisch erläutert, damit auch japanische Leser sie lesen können. (Erläuterungen vom Übersetzer sind mit Zeichen* bezeichnet gegeben im Anhang.)

Ich möchte meinen herzlichen Dank Dr. Paul Hacker sagen, der mir mit Vergnügen erlaubte, seine Abhandlung ins Japanische zu übersetzen. Der Übersetzer strebte danach, möglichst treu aus der deutschen (Übersetzung aus dem Hindi) ins Japanische zu übersetzen, aber in Betracht der Verwandtschaft des Hindis und des Japanischen—insbesonders bei den Sprachlichen Wendungen—gibt es oft Fälle, wo es besser wäre, wenn der Text direkt vom Hindi ins Japanische übersetzt würde. In diesen Fällen hat der Übersetzer nicht immer die Urform des Deutschen beachtet, sondern direkt vom Hindi ins Japanische übersetzt.

Einige Professoren des Deutschen an der Fremdsprachenhochschule Osaka und einer anderen Universität-von denen ich Prof. T. Akasaka, Prof. J. Otomasa und Prof. K. Azuma insbesondere nennen möchte-haben mir geholfen beim Verständnis der Textstellen, weil meine Kenntnisse der deutschen Sprache nicht so sicher sind. Ich bin auch ihnen sehr dankbar: ohne ihre Hilfe wäre meine Übersetzung unmöglich gewesen. Zwar haben sie mir mehrere Vorschlagen gemacht, aber der Übersetzer ist für alles, was hier steht, verantwortlich.

序　　言[1]

1. 助動詞—すなわち，それ自身一定の活用をし，他の動詞の不定形と組み合わされるもの—はヒンディー語にあっては，多様な働きをする。まず，*honā*「～である」をとると，それはしばしば，ある種の時制や「法」を作るために共に作用するという形式的な機能を有するにすぎない。*jānā* も受動態を作るのに役立つ場合，これと同じような働きをする。第二群の助動詞として，「欲求」「義務」「強制」「可能」「被許可」「許可」をあらわす助動詞（*cāhnā*, *cāhiye*; *paṛnā* と *honā* は不定詞と共に用いられ，*saknā* は語幹と共に，*pānā* と *denā* は変形不定詞*①と共に用いられる。）を総括してとりあげるとすると，それらは話法の助動詞*②と名づけてよいであろう。第三群には，相を示す助動詞ともいうべきものがあって，開始，完了，未完了，いくつかの種類の継続，進行，反覆をあらわす。（*lagnā*, *cuknā*, *calnā*, *rahnā*, *jānā*, ある場合に結びつけられる *ānā*, それに，*rakhnā* と *karnā* がそうである。）第四群を構成するのは，これま

1　普通なら入手困難ないくつかの本を私に役立たせてくれ，慣用的表現の翻訳にあたっては，きわめて親切に助言を頂いた，ボン大学講師の Tarachand Roy 氏，また同じく，テキストのある箇所を理解する上で助力頂いたばかりでなく，会話や書簡によって，貴重な資料を提供して頂いた Darbhanga *③の私の友人達，とくに Surendra Mohan Prasād 講師と Śrīkṛṣṇa Miśra 氏に対して，心から感謝の意を表したい。

で「強調形」として分類されていた助動詞である。(*denā, lenā, jānā, ānā, paṛnā, uṭhnā, ḍālnā, baiṭhnā* ——すべて語幹と共に用いられる。) 最後の第五群は，普通ごくまれにしか使われず，主動詞の不定形一通常，語幹と共に，助動詞の種類に応じて，多少共固定した結合がなされる若干の助動詞である。第三群と第四群の助動詞については，主動詞と助動詞の意味が融合してしまっていて，両者は共に同じ性質の概念を表現しているといってよかろう。その際，助動詞は何らかの形で，主動詞の意味を修飾していることになる。特に，いわゆる「強調形」はヒンディー語（他の近代インド・アーリア諸語と同様）の一大特徴をなすものであって，他のインド・ゲルマン語派の諸言語ときわ立って相違するものである。

2. 文法上，ヒンディー語の助動詞の扱われ方はひじょうに不十分である。これまでなされてきたいろいろな説明は，不完全であるばかりでなく，しばしば不正確で欺瞞的であったり，あるいは全く誤っている場合もある。とくに，いわゆる「強調形」の機能について説明される場合そうである。このことは，GREAVES[1], KĀMTĀPRASĀD GURU[2] 及び BARANNIKOV[3] の著作についてと同様，KELLOGG[4] についても言えることだ。確かに，これらすべての著作には，的を得た観察も含まれるのであるが，それでも，欠点や不備を免れるものではない[5]。

また，VALE[6] による特別の研究も，ヒンディー語の助動詞についての業績を知るという点では，何らの進歩をも意味しない。VALE によると，大ていの助動詞は「突然性」をあらわすということだが，しかし，それはすでに以前から，全くあり得ないことなのである。もし，VALE の説が正しいとするならば，まず第一に，一つの言語が突然性の一つの行い方を，そんなにいろいろな方法で言い表わすという大変な浪費をしなければならないことになろうし，第二には，——この場合がそうだろうが——一つの言語が数ある行為を，突然起ったものとして，そんなにも頻

1 EDWIN GREAVES: *Hindi Grammar*. 2nd ed. Allahabad 1933.

2 KĀMTĀPRASĀD GURU: *Hindī Vyākaraṇ*. Sąśodhit sąskaraṇ. Kāśī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā, sąvat 2009 (Sūryakumārī Pustakmālā 20).

3 A. P. 及び P. A. BARANNIKOV: *Hindustani (Hindi i Urdu). Grammatičeskij očerk*. Moskva 1956.

4 S. H. KELLOGG: *A Grammar of the Hindi Language*. 3rd. ed. London 1938.

5 A. H. HARLEY の学習書，*Colloquial Hindustani*（2版，London 1946）と THAKARDASS PAHWA の学習書，*The Pucca Munshi*（2版，Peshawar 1936）からも私は有益な観察を見出した。次の文法書は有益なことを見出さなかったが，通読した。
DUNCAN FORBES: *A Grammar of the Hindústáni Language*. New ed. London 1855. — J. R. BALLANTYNE: *Elements of Hindi and Braj Bhákhá Grammar*. 2nd ed. London 1868. — JOHN DOWSON: *A Grammar of the Urdū or Hindūstānī Language*. London 1872. — A. F. RUDOLF HOERNLE: *A Comparative Grammar of the Gaudian Languages*. London 1880. — W. ST. CLAIR TISDALL: *A Conversation Grammar of the Hindustānī Language*. London 及び Heidelberg 1911. — JOHN T. PLATTS: *A Grammar of the Hindūstānī or Urdū Language*. 6th impr. London 1920. — H. C. SCHOLBERG: *Concise Grammar of the Hindi Language*. London ²1950. — さらに，八冊の学習書を参照した。

6 RAMCHANDRA NARAYAN VALE: *Verbal Composition in Indo-Aryan*. Poona 1948 (Deccan College Dissertation Series 6).

繁に表現しなければならないであろう。従って，ここでは，ヒンディー語の助動詞，とくにいわゆる「強調」のそれに今一度，特に注意を向ける価値があると思われる。

3. 当面の研究では，とくに上にあげた八つのいわゆる「強調形」[1] の助動詞を扱うことにする。これらの助動詞に関しては，文法上の説明がとくに検討を必要としているように思われるからである。その外，*calnā* の助動詞としての機能も観察することにする。というのは，私の見る限り，*calnā* は文法的にまだ全然考慮されていないからである。また，語幹と結ばれる *pānā* も，これまでもっとも無視されてきたものであるが，これについても検討することにする。私にとって，助動詞の結合の完全なリストを作ることは重要ではなかった —— もっとも，語彙の領域では，VALE を凌ぐもっと重要なことがなされるべきなのはいうまでもなかろうが。助動詞が定まった，かつ定義しうる機能を有するという認識に立って，私は個々の助動詞について，またその個々の使用法についての例文を集めて久しくなる。そして，個々の助動詞のさまざまな種類の機能や，助動詞使用の動機，あるいは表現の意図等が確証されたものと信ずるに至った。文体の手段としての助動詞については，私は最初に，ほんの少しの指示しか与えることができない。ここでは，個々の作家の言葉の慣用を特別に研究することがぜひ必要であろうから。

4. 私が引用した出典は，PREMCAND[2] やその外の新しい作家のすぐれた文学作品である。——それらについては，例文ごとに，いちいち名をあげることにした。[3] さらに，ガーンディー信奉者達による原著やヒンディー語に翻訳された著作，文学史や語学の参考書[4]，Gorakhpur の Gītā Press 発行の宗教上の諸論文（サンスクリットのテキストと共に現れる Viṣṇupurāṇa や Bhāgavatapurāṇa[5] の訳文も含めて），雑誌や新聞の類，そして最後に，会話や書簡類から観察したものまで，出典の拠りどころとした。辞書類[6] からは，きわめて少しの材料しか得られなかった。BH. TIVĀRĪ の *Hindī Muhāvarā Koṣ* の中の若干の助動詞の結合に関する説明は有益であることが分る。*Hindī Śabdasāgar* 大辞典は，多くの動詞について説明しながら，なお，助動詞

---

1 これらの八つの助動詞と並んで，さらにいくつかの助動詞が「強調形」にくみ入れられるのが普通である。とくに，*rahnā* と *rakhnā* がそうである。しかし，§8，§12，§31で示すように，助動詞に関して使われる「強調」という術語はひじょうにあいまいなので，*rahnā* と *rakhnā* をはじめから相を示すものとしてとり出すことにする。時折，「強調形」と名づけられる助動詞が他に若干あるが，めったにあらわれないし，理解するのに格別困難ではないのでここでは扱わない。

2 以下，Pr. と略記する。

3 例文の典拠指示は，文学と他の若干の書物にもとづくものである限り，補遺（§105）に掲げた。*④

4 例えば，RĀMCANDRA VARMĀ: *Acchī Hindī*. 7版. Banaras, saṃvat 2009.

5 以下，VP 及び BhP. と略記する。

6 一言語のものとして，ŚYĀMSUNDARDĀS: *Hindī-śabdasāgar*. Khaṇḍ 1—8. Kāśī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā 及び Prayāg: Indian Press 1926—1930. — RĀMCANDRA VARMĀ: *Saṃkṣipta Hindī-śabdasāgar*. 5版. Kāśī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā, saṃvat 2008. — RĀMCANDRA VARMĀ: *Prāmāṇik Hindī Koś*. 2版. Banaras: Hindī Sāhitya Kuṭīr, saṃvat 2008. — KĀLIKĀ PRASĀD 他.: *Bṛhat Hindī Koś*. Banaras: Jñānmaṇḍal Ltd. 初版. saṃvat 2009, 2版. 2013. — NAVALJĪ: *Nālandā Viśāl Śabdakoś*.

としても用いられ，助動詞としての機能をもつ動詞全部については説明していない。ここでなされている定義には，文法上の定義について上で述べたことが適用されているだけである。それらは，すぐれた観察も含んでいるが，しかし，おびただしく，補遺と訂正の余地を残している。助動詞との結合形態として現れる多くの動詞についても又，示されてはいるが，しかし，この説明は完全なものとはいえない。それに，まさに動詞と助動詞の複合語にとってきわめて不可欠のものだろうが，訳のついた例文さえ欠けているのだ。私の知っているその他の辞書には，助動詞の結合については，ほとんど示されていない。ただ，PLATTS は例外で，いくつかのよく知られた助動詞の結合を，訳文を通じて明らかにしようと試みている。当面の研究で自分に課している課題は，純粋に語彙的なものではないので，PLATTS は私の助けとはならなかった。概して，辞書の類は，孤立した単語の意味を確かめるためだけしか利用できない。[1]

5. 本書で用いた引用文はすべて，ごく新しい時代に属するものであって，どの引用文も五十年より古くはない。私の成果が従来の文法と多くの点でちがっている理由は，これによって説明できよう。上述の文法の材料が部分的には，khaṛī-bolī*⑤ の散文の初期の頃のものからとられているからである。しかし，その後，文学に用いられる言葉は明らかに文章論的発展を成し遂げたのである。文学においてと同様，文章論や文体や語彙においても，ヒンディー語の現在の生命は改革と実験の支配を受けているのである。助動詞の使用における改革は，我々は *ānā*, *uṭhnā*, *calnā*, *pānā* のところで出会うことだろう。その外，ここでは扱わないが，*cāhnā* の使用において一つの変化が起っていると思われる。この助動詞は KELLOGG によると，過去分詞（この場合，動形容詞といわれる）やあるいは変形不定詞や，あるいはまれに不定詞と結合されるのだが，しかし今日見られるのは，KELLOGG の書（§ 436 a）でまれだといわれている用法のみがほとんどである。しかしながら，このような傾向については，ここでは示唆するだけにとどめておく。

Dehlī, saṃvat 2007. 特殊な辞書として：BHOLĀNĀTH TIVĀRĪ: *Hindī Muhāvarā Koṣ*. Ilāhābād: Kitāb mahal 1951. 二言語によるものとして，R. C. PATHAK: *Bhargava's Standard Illustrated Dictionory of the Hindi Language*. 3rd. ed. Banaras 発行年不明（粗略で欠点だらけである）. — *The Student's Practical Dictionary Hindi-English*. 8版. Allahabad 1949（いく分すぐれている）. — V. M. BESKROVNYJ: *Hindī-Rūsī śabdakoṣ. Hindi-russkij slovaṛ*. Moskva 1953. — JOHN T. PLATTS: *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī, and English*. 4th impr. London: Oxford Univ. Press 1911.

1 ヒンディー語の辞書類を著わしたインド人達は，一つの単語の構成の概念を把握していないようだ。彼らが提供しているのは，——部分的には，とくに *Prāmāṇik Hindī Koś* は大変すぐれているが——孤立した単語の意味の定義と，その外に，慣用的な言いまわし（*muhāvarā*）に言い換えをつけたものにすぎない。ある単語が文章の中にどのように組み入れられるかという方法に関しての一般的な説明はほとんど全く欠けている。これに反して，BESKROVNYJ のヒンディー——ロシア語辞典は単語の構成を多く収録しているし，その意味の箇条書きはとりわけ上手に配列されている。しかし，残念ながら多くの語彙が全然のっていない。真に使用に耐えるヒンディー語の辞書の出現は，今なお切にのぞまれるものと思われる。PLATTS のすぐれた労作も，今日ではもはや満足すべきものではない。

6. ヒンディー語の歴史や他のインド・アーリア諸語との手近かな比較をふりかえってみることは当面は断念せざるを得ない。それはさしあたり，余りにも複雑で広範囲な課題だろうから。現代ヒンディー語の慣用語法に則した助動詞に対して提示されなければならない問は，まず第一に，言語学の初歩的な問題である。かかる助動詞の意味の疑問に対する答えは，おそらくは，歴史的前段階を知り，かつ親族関係にある諸言語との比較を通して時折すすめることができるだろう。しかしまた，しばしばこういった方法は妨げられ，誤った道に導かれることもあろう。個々の助動詞の機能は言語によってひじょうに異なることがしばしばあるし（*uṭhnā* のところで，このような相異点について少し言及する機会があるだろう），全く同一の言語の個々の発展段階においてもちがいはあるのだから。それ故，現代の言葉を最初に考察するのが最上である。何故なら，現代語にはその意味を調査するための方策の多くもまた，役立つからである。

7. 合理的でありたいという理由から私の採用した音写の仕方について注意しておくと，鼻母音は字の下につけた釣針型で示す（たとえば，*ṇ* の如く）。ऋ と ॠ が混同されることはあり得ないので，両方共 *ṛ* であらわす——というのは，ऋ は ॠ とちがって，母音のすぐ前やあるいはすぐ後には現れないから。ここで使った *tatsama*[*⑥]語彙の音写は，実際の発音と，サンスクリットの語彙を音写するのに使われる文字で我々の慣れ親しんでいるものとの折衷である。*tatsama* 語彙のうち，中間音においては，すべての *ā* は *a* とかく。尾音や複合音のつなぎ目の中では，それらは省略されるし，若干の子音の結合の後の場合のみかかれる。ペルシャ語やアラビア語起源の語彙についての音写もまた，折衷である。おそらくは，——今日では，Nāgarī 文字[*⑦]で書かれる場合は大ていそうであり，発音される場合もしばしば慣例となっているように——Nāgarī 文字の下に点をつけてあらわされうる相違には注意しなくてもよかろう。しかし，私はこれらの区別が Nāgarī 文字で表現されうる限りは，その区別を維持することにした。ख़ は *ḵh*，ग़ は *ġ* であらわす。その他のものについては，私の使った記号は慣習によるものである。

I. denā

8. *denā*「与える」は，*lanā*「とる」が語幹と結ばれて古い Ātmanepada[*⑧]の意味を表わすように，同じく語幹と結ばれて Parasmaipada[*⑨]の意味を表わすことは，よく知られている。しかし，このちがいが一般的にあてはまっていないのは何故だろうか。それと並んで，*denā* とも *lenā* とも合成されない，従って Parasmaipada でも Ātmanepada でもないと思われる中間の形が存在するのは何故であろうか。このことを解明するために，強意態という概念が導入され，一連の助動詞をば強調形として分類されたのである。そして，これらのうち *denā* は単に強調のみを表わし，他の助動詞はしかるべき種類の強調を表わす，とされている。しかし，*denā* との合成語はサンスクリットの *yaṅ*[*⑩]の意味での強調でないことは明白である。何故なら，それは余り

にも頻繁に現れるからである。*denā* と合成されるすべての動詞を強調形と解釈するのは，原文の意味を全く歪めることになろう。*denā* が，ある行為が特別に骨を折ったり，又，格別に完璧に行なわれることを表わすのでもなければ，話し手がある行為を特に強調して考えていることを表わすのでもないことを示すには，以下で論じられるべき例文によって十分である。*denā* について言われていることすべてに何もあてはまらぬとすれば，*denā* の複合語の表示でもって強調が表現されたことには全然ならない。そこで，*denā* が複合語の中で本来果す役割について研究されるべきである。

9. まず第一に，助動詞としての *denā* の機能はそのもとの意味（「与える」）によって規定される。多くの結合において，その機能は明らかである。*denā*が指示するものが単に，ある行為が主語から離れて移動するということにすぎない場合がそうである。これに属するものは，*denā* の Parasmaipada 機能を示す範例である。*likh denā*「(誰かに，たとえば手紙を）書く」すなわち，「書いてしまってから渡す」。さらには *bhej denā*「(向うへ）送る，送付する，発送する」。必然的に，主動詞としての *denā*「与える」もひじょうにしばしば，助動詞としての *denā* と結合され，*de denā* となる。「与える」という行為が主語から離れてゆき，すでに主動詞の意味に含まれているこの要素が，助動詞によって明白にされるからである。

10. 他の助動詞の場合と同様，*denā* の場合もしばしば，合成語の意味は状況に応じてさまざまである。そのようなものとして，たとえば *paṛh denā* があるが，これは字義通りには「読んでしまってから与える」という意味だが，しばしば「読んできかせる」という意味にもなる。しかし一般に，この合成語はその外のことも意味することができる。たとえば誰かが，ある碑文を解読したと主張し，原文とその碑文の意味をうわべだけは述べてはいるが，実際はその碑文を全く理解していないような場合，彼の行為は主語から離れてゆき，「ただ他人のためだけに」読むことという特別の意味（*paṛh denā* は *Acchī Hindī* の 106 頁にこの意味で使われている）となる。同じように，*bolnā*「話す」と結合される *denā* は状況にもとづく機能を備え得る。たとえば，ヒンディー語を母語としない人について，*vah Hindī bol detā hai* といった場合，それの意味するものは，彼がヒンディー語を全く事も無げにしゃべっているのではないということである。彼はヒンディー語を「しゃべり伝え」，自分の意志を相手に分らせ，他人のために話すことはできるが，自分自身のためにヒンディー語を話しているのではない。彼はヒンディー語で考えているのではなくて，彼がヒンディー語をしゃべることは彼にとって全く自然ではないのである。しかし，又，ちがった意味で他人のために話すということが，Viṣṇupurāṇa 伝説の Bharata が愚人を装う場面に現れる。

jab koī us se bahut pūchtāch kartā to jaṛ ke samān kuch asaṃskṛt, asār evaṃ grāmīṇ vākyoṃ se mile hue vacan bol detā

(VP[1] 2, 13, 40)

「誰かが彼に多くのことを問いただすと，彼は愚か者のように無教養な，無意味な，そして野卑な言葉の交ったことをしゃべるのだった。」

分りもしない碑文を読めると偽って「述べた」学者の場合と同様，この文で暗示されるのは，その行為によって，事実に適応しない印象がよびおこされるということである。

11. 従って，語幹と用いられる *denā* がまず意味することは，行為者がその行為を自分から離れて「向うへ与える」ということ，特別な場合は，彼がその行為を「他人のために」為すということである。このことと通例，そして又全く当然に結びついている概念は，その行為が「向うへ行く」ことであり，その行為は他動詞であり，それは実際の行為であって，単にできごとや状態ではないということである。*denā* は主動詞に，他動的な限定を加える。これに属する動詞には二つのグループがあって，ひじょうに頻繁に *denā* と結合して用いられる。

a）使役，ある自動詞または他動詞から派生する。例：

nikalnā「出る」: *nikālnā* または *nikāl denā*「とり出す」

lauṭnā「戻る」(自動詞): *lauṭānā, lauṭā denā*「戻す」(他動詞)

ṭalnā「退く」: *ṭālnā, ṭāl denā*「そらす」「はずす」

bigaṛnā「だめになる」(自動詞): *bigāṛnā, bigāṛ denā*「だめにする，損う」(他動詞)

dekhnā「見る」: *dikh(l)ānā, dikh(l)ā denā*「見せる」

bichānā「(例えば敷物を) 広げる」: *bichvānā, bichvā denā*「広げさせる」

その他，もっと多くの例がある。

b）二番目のグループを成す動詞は，一般動詞 *karnā*「作る」とサンスクリットの過去分詞，形容詞それに名詞との合成語であって，単に行為を表わすだけではなくて，ある作用とか，状態をひきおこすことを表わす。

過去分詞との例：

utpanna kar denā「生み出す」　　*śānt kar denā*「鎮める」

形容詞との例：

alag kar denā「引きはなす」　　*pūrā kar denā*「満たす」

名詞との例：

nirṇay kar denā「決める」　　*ḳharc kar denā*「支出する」

12. 双方のグループ共，幾百通りもの例を集めることができよう。無選択に抽出した少ない例だけでも，*denā* においては行為の強調を表わすことが中心でないことが結論ずけられる。何

1 *Śrīśrī-Viṣṇupurāṇ* (mūl ślok aur Hindī-anuvād-sahit). Anuvādak: Munilāl Gupta. 3版. Gorakhpur: Gītā Press saṃvat 2009.

かあることを成しとげたり，示したり，作り出したり，引き離したり，与えたりするようなことは，それ自体何ら強調ではなくて，あるヒンディーの物語のどの頁にも，その都度大切なのは全く普通の行為とその行為の全く普通の表現であることが，その文脈での *denā* の合成語の用いられ方によって，示されている。強調化することは，何か特別で例外的なものについてであって，そうでないものは強調化されないのである。ヒンディー語には，集中的に行なわれる行為とか，あるいは強く思い浮べられる行為とかの表現法があることを我々は見るだろうが（§74—83），しかし，それは語幹との結合ではない。

13. 二つのグループの動詞に *denā* が規則的に現れていることから，むしろ暗示される事柄は，これらの動詞の意味に，助動詞 *denā* の使用を動機づける何かあるものが存在するということである。これら動詞のすべてに共通なのは，その決められた他動詞という性格である。最初のグループ（使役）のすべての動詞はそれと並んで付属物として，一個の自動詞又は使役より弱い他動詞をもっている。それと使役動詞とのちがいは一つの形式的要素，つまり大てい語根を長音化したり，*ā* をつけ加えたりすることによって区別され，それによって行為が目的語に向けられることが意味されるのである。ところでそれとは又別に，助動詞の場合だけ作用を及ぼすのではなくて，ヒンディー語全体を本来的に貫ぬいているヒンディー語の文体的性癖，つまり重複の傾向ということがでてくる。この重複傾向の存在する所以は，全く同じ概念とか同じ感情とかが，同時により一層明確な形をとって表現されるのを好むということ，又，思想のある種の変化やニュアンスも全く好んで表現されるということである。たとえば，*keval* 又は *sirf* の使用一度であらわされる占有の概念*⑪は，しばしば話し手の観念をひじょうによく満たすため，話し手はさらにもう一度 *hī* 又は *mātrā* 又は *bhar* により，さらになお *hī* によって三度も自分の観念を表わすことがある。同じように，他動詞性という概念が使役を示すものの一度の使用によってひじょうに強く喚起させられるため，本来主語から離れてゆく方向を示す助動詞による二度目の表現が求められるのである。その際，同時に，他動詞は形を変えた自動詞又はより弱い他動詞によって目立たされることになる。従ってここで果す *denā* の役割は，そうした行為の行動特徴を明白化するものと定義することができる。使役のしるしが暗示する事柄は，行為が目的語をとり，その行為が実際の行為であって，単にでき事でないということである。*denā* はこのことをもう一度説明し，さらにその行為が主語から離れて外へ出ることを言い足すのである。

14. *denā* は又，ある結果なり，ある変化なりが生じることを表わす。つまり，二番目のグループにおける *denā* がそうである。変化というのは本来，すでに，これらの動詞が状態を表わす語を，「作る」という動詞と結合させるということによって表現されている。しかし，*denā* は，実際に何かがなされ，生じ，完成され，変化させられること（しかも主語の外において）をもう一度あらわすのである。ここには，行為の作用性という解釈が存在する。そして使役の場合と同

様，*denā* も又ここで対照的な働きをする。使役はその構造よりして，でき事を示す語又は，その使役が因ってきた単純な他動詞を連想させる。二番目のグループにおける動詞は不変の状況語（分詞，形容詞，又は名詞）を，構成要素として含んでいる。あるでき事又は状態のこの概念と，使役を示すもの又は動詞 *karnā* はすでに距離を隔てているのだが，重複を好むヒンディー語はその対比をば，*denā* を加えることによって，さらにもう一度強調するのである。

15. 両方の場合，*denā* のなす説明が意味するものは限定である（そしてそれ故，KĀMTĀPRASĀD GURU の術語では，*denā* の如き動詞は '*avadhāraṇ-bodhak*'*⑮と名づけられている——396頁）との解釈は，「強調」よりも本質的によい。ただ，このインド人文法学者に欠けているのは，ここで問題とされている '*avadhāraṇ*' の性質についての詳細な説明である。*karnā* と結ばれる動詞についても，使役の場合も，この限定の中に全くさまざまなニュアンスが受け入れられるということはあり得ない——全く同じ動詞についてもそうである。とくにこれらの動詞を研究し，個々の動詞をいくつかの前後関係の中で調べたり，そしてそれら動詞の機能のさまざまな状況にもとづくニュアンスを記述するためには，一つの包括的な，語彙的文体的研究が必要であろう。このような若干の動詞については，すでに §9—10で論じた。ここではさらに，若干の観察をつけ加えよう。

16. 周知の通り，個々の場合にヒンディー語の一つの助動詞のもつ機能は，多くのインド・ゲルマン語派の諸言語にあっては，意味の上から動詞と一単位を成す接頭辞とか前置詞とかあるいは又，副詞によって言い換え可能なことがしばしばある。しかし，接頭辞と前置詞と副詞が動詞の概念に，特別な限定を与えるのに対して，*denā* やその他の助動詞がヒンディー語の動詞に与える限定はひじょうに一般的なものである。従って，ドイツ語に翻訳された場合，一つの *denā* に対して，状況に応じてひじょうにさまざまな前置詞あるいは副詞が相応するのである。だから，たとえば *ḍāl denā* は，'hinlegen'（横たえる），'weglegen'（片づける），'hineinstecken'（挿入する）その他多くの意味がある。*bhej denā* も 'zuschicken'（送付する），'abschicken'（発送する），'hinschicken'（そこへ送る）等さらに多くの意味をもつ。さらに，副詞の *hī* もこれと似た事情にあるが，それについては，*denā* による限定の重複表現と，*hī* による占有の重複表現とを比較したときに指示した。副詞が助動詞と平行した機能をもつことは，*hī* が単に一般的な強勢を示すのに対し，*denā* が単に，ある行為の，行為としての一般的な限定を示すという事情にある。状況次第でドイツ語では，ひじょうにさまざまな副詞（たとえば，*nur* 単に，*schon* すでに，*noch* まだ，*gerade* 全く，*eben* ちょうど等）が一つの *hī* に対応し，動詞と結合したさまざまな前置詞あるいは副詞が一つの *denā* に対応するだろう。そして，一個のより正確な副詞表現（たとえば，制限の場合の *keval* の如く）によってすでに強調が描写されているとき，*hī* によってさらにもう一度強調が表わされるように，動詞の場合も又，一個の特別な副詞によってす

でに限定が示されているとき，大てい一個の助動詞によって限定がさらにもう一度一般的な形で（しかも他動詞の場合には *denā* によって）表現されるのである。例：

(*vah*) *avaśya kah degī*「彼女はきっとそれを言うだろう」

yadi (*vah*) *us se apnī ārthik daśā sāf-sāf kah dete*…(Pr.)[1]「もし彼が彼に自分の経済状態をはっきり打ちあけておれば…」

ここでは，より確かな開始，そして精確さ，従って限定の特殊な場合——行為又は行為に関する概念に固有であるところの——が副詞によって，そしてそれから *denā* を追加することによって動詞でもう一度表わされているのだ。もちろん，*kah denā*（大体，「説明する」と訳される）だけでも限定の表現には間に合う。

17. *denā* が動詞表現に与える限定は，行為が行為自体として状態やでき事と区別されることをつねに含んでいる。この事で，動詞 *rakhnā* を挙げることができる。非合成語としての動詞 *rakhnā* は「おく」とか「横たえる」という意味だが，同時に「保つ」「もつ」をも意味することができる。例：

Āp sadā baṛhiyā chaṛī rakhte haiṇ (*Śabdasāgar*)「貴方はいつも立派な杖をもっておられる」

ghoṛā rakhnā「馬をもつ」(所有して飼育すること) °*kā sāhas rakhnā*「…する勇気をもつ」

最初の例文では，*sadā* が加えられていることによって明らかにされていることだが，*rakhnā* の一用例を示すため上の文を作った辞書の著者は，このような場合 *rakhnā* は何か持続性のあるもの，継続的なもの，従って一つの状態を表わすとの概念をもっていたわけである。外の例でもこのことは明白である。それに対して，動詞が状態ではなく変化の意味を含む動作をあらわしていることを表現しなければならない場合は，*rakh denā* というのである。

maiṇ chaṛī mez par rakh detā hūṇ　「私は杖を机におく」

18. 状態描写の動詞から見られたように，*denā* との合成語はしばしば，最後に挙げた例文におけるように，始動の意味をもつ。この意味ではもう，*denā* は若干の自動詞とさえ結合することができるのである。

cal denā「離れる」「出発する」(§ 49 の *cal paṛnā* を参照)

ro denā「わっと泣きだす」，*haṣ denā*「爆笑する」「どっと笑う」，*muskirā denā*「微笑む」似てはいるが同じでない意味で，はじめの三つの動詞の場合，*denā* の代りに *paṛnā* が，*ronā* と *haṣnā* については，*uṭhnā* も又用いられる。

19. *denā* と結ばれる主動詞の形は語幹であるが，しかしこの場合語幹は，他の助動詞と結合

---

1 PREMCAND: *Sevāsadan* 77頁。（発行年不明。Sarasvatī Press, Banaras）

される外の語幹の場合と同じく，その先行性という普通の意味をもたない。若干の結合例についてはもちろん，主動詞に表わされていることがなされた後に「放し与える」ことが次いで起る（たとえば *likh denā*「書いてから手渡す」）と説明できようが，しかし大ていの場合は，助動詞の行為は——動詞がもう一つの動詞にニュアンスを加えるにすぎない場合に，その動詞の行為がなお話題となりうる限りは —— 主動詞の行為と全く同時に行なわれるのである（例えば，*rakh denā* の場合，「おく」ことと「放し与える」ことは同時である)。それ故，関連している行為の性質に従って，語幹が先行性を示しているとの説明が可能であろうような数少ない場合をも，言語感情に応じて絶対的に一体をなす行為だと理解しなければならぬだろう。つまり，*likh denā* は「意図して書く」「書かれたものを手渡す」「他人のために書く」という意味である。この理由により，主動詞が助動詞の前でとる形に対して 'Stamm' という名称はとがめらるべきではない。今日のヒンディー語の状態からみると，それは形式的な，又，意味の上での一つの 'Stamm' である。何故なら，形式上は，この形があらゆる変化形において固持されており，意味の上からは，助動詞との結合においてこの形がただ当該の動詞の一般的な内容をあらわすだけだからである。ところが一方，確実性のニュアンスをふくめてのあらゆる関係は助動詞によって表わされるのである。主動詞が語の幹をなすものであり，助動詞は語尾である。

II. lenā

20. *lenā* も又，ある行為の表現に，それが実際に，ある行為であって，単なる状態とかでき事ではないという意味で限定のニュアンスを施す。しかし，その行為の方向は，*denā* の補助によって述べられるそれとは異なる。すなわち，*denā* の場合には，行為が主語から離れてゆくのに対し，*lenā* の場合は，主語が行為の唯一の目的であれ，主語が何らかの方法で行為に関わりをもつものであれ，行為が主語に作用するのである。今日のヒンディー語で *lenā* が助動詞として用いられるあらゆる場合に，(*denā* との結合が Parasmaipada と全く同一視されてはならないのに対し）古代インド語なら Ātmanepada を用いたであろうと主張しても多分よいであろう。*lenā* との結合は，行為が一般的な意味で一つの再帰性を含む場合に，規則的に用いられる。再帰性は外の手段によってすでに表わされていることがときどきあるが，その場合助動詞はやはり，重複表現として作用するのである。しかし，往々にして，助動詞が再帰性の唯一の表現であることもある。以下に，*lenā* の用い方を分類して明らかにしてみたい。

21. *lenā* は，行為者又は行為者に属するもの（彼の身体や心，身体の部分，性質，行為，彼の態度又は彼の立つ関係あるいは，彼の所有物）が行為の目的語である場合に用いられる。例：

videśī sąskṛtiyǫ ne bhāratīyatā ke raṅg mę apne ko raṅg liyā 直訳：「外国の諸文化は，インド性という色彩に自らを染めた」

us ne apne mastak ko nīcā kar liyā[1]「彼女は自分の頭を垂れた」

log un vacaṇ̣ ke anusār apnā jīvan banā lete haiṇ̣「人々はそれらの言葉に従って，自らの人生を形成する」

maiṇ̣ apnī madad āp kar lūṇ̣gī (Pr. *Sevāsadan* 114頁)「私は自分で自分を助けましょう」

これらの例では，再帰性はすでに再帰代名詞又は再帰形容詞——すなわち，*apne ko, apne mastak ko, apnā jīvan, apnī madad* によって表現されている。使役や *karnā* との結合の場合に，主語から離れて外に向って作用するという概念が，一度言語の要素によって換起され，そしてさらに *denā* の追加によって正確な表現を施すように，再帰的構文の場合，行為の反作用という概念が一度再帰代名詞によって意識され，その第二の表現をひじょうに規則的に *lenā* によって呼び起こすのである。しかし又，再帰性が助動詞によってのみ示される場合もある。そういう場合翻訳にあたっては，我々は目的語に所有の再帰代名詞をつけ加える。例：

saṇ̣sār kī bādhāṇ̣ se mukh na moṛ le (*citralekhā* 34頁)「世の不幸から自分の顔（又は自分自身）をそらさないでほしい」

maiṇ̣ne sabhā se sambandh toṛ liyā (Prāmāṇik H. Koś, 序文2頁)「私は会との自分の関係を断った」

もっとも，双方の例においては，所有代名詞を省略することもできるが，しかし，ヒンディー語は行為に内在する再帰性が又，外在化されることを要求していることは明らかである。

22. *lenā* は又，行為が目的語としての行為者に関連していなくても，行為者又はその身体に向って移行するにすぎない場合も用いられる。この助動詞の表わす概念はドイツ語では，こういう場合しばしば，再帰代名詞のある格又は，関係代名詞のある前置詞との結合によって述べられる。これには多少共固定した結合が沢山ある。例：

bulā lenā「自分のところへ呼びよせる」；*dhāraṇ̣ kar lenā* 比喩的な意味で，たとえばある形（*rūp*）を「とる」*rakh denā* の場合と同様（§17参照），ここでも助動詞の追加によって，動詞が単に一つの状態（「保っている」）ではなく，一つの行為をあらわすことがひき起こされ，*lenā* の選択は，この行為が再帰するものであることを説明する；

apnī or ākarṣit kar lenā「自分の方へひきつける」，行為が行為者の方へ向って動くことの二重表現をもって；*apnā lenā*「自分のものとする」；*pakaṛ lenā, grahaṇ̣ kar lenā*「捕える，摑む」；*ainak lagā lenā*「めがねをかける」；*oṣadhiyṇ̣ kā sevan kar lenā*「薬を服用する」；*sameṭ lenā, baṭor lenā*「集める」；*cug lenā*「啄む」；*ukhāṛ lenā*「引き抜く」（運動は行為者の方へと向っている！）；*rakh lenā*「自分のために（与格）しまいこむ（たとえば，ポケットの中に）」また「人を雇う」；*apne kamre mṇ̣ ākar us ne kivāṛ band kar liye* (Pr.

1 BHAGAVATĪCARAN VARMĀ: *Citralekhā* 14頁. (10版. Prayāg, saṇ̣vat 2009)

Sevāsadan 254頁）「自分の部屋に入ってきて 彼女は後の戸を閉めた」。「後の」と我々が表現する概念が *lenā* によって表わされるのである。

23. さらに又 *lenā* はこういう場合に用いられる——すなわち，行為者又は彼に属するものが行為の目的語でなく，その行為も又，具体的な行動をとって彼の方へと移行しないのは確かとしても，しかし，行為がその性質に従って行為者に関わる場合である。その関わりがどの程度かといえば，何かが行為者の内部で又は彼に沿って起こりあるいは変わるか，あるいはその行為の結果があらわれないか，あるいはただ外部の目的語にのみあらわれるのではなく主語にもあらわれるかである。又さらに，行為の結果が主語に帰するような種類の行為がある場合に，*lenā* が使われるのである。これらの場合，ドイツ語の翻訳では，再帰代名詞が用いられることは稀である。何故なら我々ドイツ人は，行為にすでに暗示されている主語の関わり合い，換言すれば自然によって行為に与えられた状況（行為の結果が主語に役立つかあるいは主語のものになるという状況）をば，表現としてことばを使っていうことを要しないからである。ところがヒンディー語は，一つの同じ行為とか状況とかにあるさまざまな要素を詳細に広げることを好むのである。

a）主語が行為と関わり，行為が主語に影響する場合。

意識現象をあらわす動詞(広い意味での感覚動詞)の多くがこれに属する。この場合，*lenā* との合成語は単一動詞としばしばこの点で異る——つまり後者が持続性を暗示するのに対し，前者は行為又は状態の始まりを暗示する。又，前者はしばしば，ある結果なり影響なりが主語においてでき上ることをきわ立たせる点で後者と異なる。従って，*denā*の場合と同様，行為なり作用なりの性格が正確に表現されるわけである。*denā* とのちがいはただ，行為の方向においてのみである。例：

cakh lenā「味わってみる」；*jān lenā*「認識する，知るに至る」（単なる *jānnā* は「知る，知っている」という意味である）；*samajh lenā*「理解する」（§ 38 参照）；*pahcān lenā*「識別する，認知する，悟る」；*tāṛ lenā*「推測する，解明する」；*andāzā kar lenā*「推定する，想像する」；*patā lagā lenā*「探知する」；*viśvās lagā lenā, viśvās jamā lenā*「信じる，信頼する」；*mān lenā*「信じる，認める，場合を仮定する，意にとめる」；*vicār kar lenā*「考慮する」；*svīkār kar lenā, aṅgīkār kar lenā*「承認する」；*niścay kar lenā*「決心する」；*ṭhān lenā*「決意する，とりかかる」（§ 62の最後から二番目の例文参照）；*hṛdayaṅgam kar lenā*「思い浮かべる」；*sīkh lenā, adhyayan kar lenā*「（効果的に）学ぶ，勉強する」；*kaṇṭh kar lenā*「記憶する」；*paṛh lenā*「（理解して）読む」（§ 10 の *paṛh denā* と *Acchī Hindī* からの引用文を参照。同じ文脈で R. C. VARMĀ は，一人の学者がある碑文を「読み」，彼がそれを解読した後，又理解したといいたいときに，*paṛh lenā* を数度使っている。）；*sun lenā*「耳を傾ける，聴いてそれに注目する，聴いて理解する」；*dekh lenā*「見入る，注視する，しらべる（たとえば辞書である単語を）」

行為が結果をもつことは，この場合も又，ドイツ語では接頭辞によって表現される。

'erkennen' 'erraten' といったふうに。

b）行為の結果が主語に役立つ場合。例：

ḍhūṛh lenā「捜す，自分のために（与格）捜す」；*jīt lenā, vijay pā lenā*「勝つ，勝利を勝ちとる」；*pā lenā*「獲得する，入手する」；*daḳhal kar lenā, vaśībhūt kar lenā*「服させる，意に従わせる」；*le lenā*「とる」,*denā* と同じく *lenā* も，助動詞としてのそれ自身とひじょうに規則的に結ばれる。この結合はすでにのべたグループ（§ 22）に入れることができよう。；*cun lenā*「選ぶ」（単に自分のために選択するのではなく，単なる「選ぶ」の限定を示す形。）

24. しばしば，*lenā* の使用が次のことにも帰因することがある。つまり，行為に際して共に作用するか，あるいは（形式上には文法上の目的語がなくて）行為と関わり合っている何かが，§ 21で述べた方法で，主語の一部を成すことによってである。時析，一つのこのような，共に作用しあい，共に関連する対象が文章の中で挙げられ，合成された再帰形容詞で主語の一部をなすものと示される。このような場合に関して上記§ 22で述べた場合のように，再帰代名詞又は所有詞のある格が文章にあらわれるとき，*lenā* の使用の傾向が存在するという外部的だが実際的な規則が示されるのである。しかしときどき，再帰形容詞が欠けていたり，全く表現されずにただ行為の性質によって，主語の附属物が共に作用し，又は共に関連していることが暗示される場合もある。例：

主語に附属する何かが行為に際して手段として共に作用し，表現されるものとして挙げられ，再帰形容詞と結ばれる場合。

ham apne bhrānt malin man se Prabhu mę aise ādhār kā ārop kar lete haį[1]「我々は 自分達の 誤った不浄な心で，神を このような 手助けをしてくれるものと決めるのだ」（つまり，たとえ罪深きのぞみが祈られたとしても，神は助け給うだろうと考えよう。）

主語に属するものが行為に作用され，再帰形容詞を欠く場合。

us icchā mę ham pahle se hī sudhār kar lę (*Satsaṅg-sudhā* 14)「そのことを願うにあたって，我々ははじめから正しいものに改めねばなるまい」—それが我々自身の願いである故，*lenā* を使う。

行為者自身の身体が共に作用し関連をもつが，表現されるものとして挙げられない次の自動詞の場合。

pīche ho lenā「後に従う」；*sāth ho lenā*「従う，同伴する」；*ā lenā*「ついて来る，従う」；*jā lenā*「追いつく」；*ho lenā*「なる，生ずる，現れる」（この動詞は上の§23のa)に組み入れてもよかろう。）

PREMCAND の次の文も又，これに属する。

Suman un ke pīche-pīche ātī thī, kabhī sāmne ākar rāstā rok letī aur kahtī…(Pr. *Sevā-sadan* 119頁)「Suman は彼の後をついてやってき，ときには前方に来て彼の道をふさぎ，

1 *Satsaṅg-sudhā* 13/14 (Gorakhpur, saṃvat 2009)

そしてこう言っていたものだ…」

「妨げる，とめる」は別に，しばしば *rok denā* であらわされるが，ここでは妨害は行為者自身の身体によって起っているので *lenā* である。

25. 行為がその一般的な性質に従って主語との関連性を含まないとしても，特別な場合主語の利益または不利益となるときに，*lenā* が使われる。ここでは再帰性はそれ自体として動詞に固有でないので，ドイツ語の言い換えでは又，再帰代名詞が頻繁に現れる。例：

nikāl lenā「自分のために（与格）とり出す」

ham logo ne Urdū aur Hindī ke do alag-alag kaimp banā liye hai (Pr.)[1]「私達はウルドゥー語とヒンディー語という二つの別々の陣営を作りました」

後者の例文は§24に入れてもよかろう。

jitnī bātę maine kahī, ve sab ek-do-tīn karke un se doharvā lī (VINOBĀ)[2]「私の言ったこと全部を，一語二語三語と彼らに繰り返えさせました」

ここでは行為者は彼を照準とするもう一つ別の行為を誘発している。

agar unhę nārāz kar lū (Pr. *Sevāsadan* 207頁)「もし彼を私に対して怒らせたら…」

「私に対して」という概念はヒンディー語ではただ，*lenā* によって表わされる。

次の文例では，*lenā* は精神的関心を表わし，しばしば行為者のその行為への没入を表わす。

jab tak Gaṅgājalī jītī thī, Śāntā us ke ancal mę muh chipākar ro liyā kartī thī (Pr. *Sevāsadan* 147頁)「Gaṅgājalī が生きていた間は，Śāntā は Gaṅgājalī のサリーのすそで顔をかくして泣いていたものだった」

mujhe ek chan-bhar Ṭhākurjī ke carnę par gir lene do (Pr.)[3]「私を一瞬でも（それが私を誘発させるように）神様の（偶像の）御足に伏れさせよ」

maine tīs rupae māsik kā prabandh kar liyā hai (Pr. *Sevāsadan* 109頁)「私は毎月三十ルピーの支払の配慮をした」

「配慮をととのえること」は別に，*prabandh kar denā* もそうであるが，ここで *lenā* が表わしているのは，行為者の精神的関心であって，物質的関心ではない。何故なら彼はそのお金を自分のためにもっているのではなく，他人のために気づかっているのだから。

tumne Hindū jāti kī lāj rakh lī (Pr. *Sevāsadan* 124頁)「お前はヒンドゥ社会の名誉を守った」

abhī maī bālak hū, isliye icchānusār khel-kūd lū (VP 1, 17, 72)「私はまだ子供ですから，好きなように遊んだり跳ねたりしたいものです」

---

1 PREMCAND: *Kuch Vicār*. 86頁. 4版. Banāras: Sarasvatī Press 1949.

2 *Vinobā ke Vicār*. Bhāg 1—2. 7. 等 1, 98。3版. Naī Dillī: Sastā Sāhitya Maṇḍal 1954及び1952.

3 PREMCAND: *Mānasarovar*. Bhāg 3 (5版), Bhāg 5 (3版). 5～6頁. Banāras: Sarasvatī Press 1950.

ここでは，行為への没入は *lenā* 以外に，副詞的にも表わされる。*lenā* の前に，§62の4の例の如く，二つの語幹がきている。

26. 再帰性の特別な形が相互関係である。従って，「対話を導くこと」を意味する動詞は，限定の形として *lenā* との結合をもつ。例：

maị bātcīt kar lṇgī (Pr. *Sevāsadan* 115頁)「私は話してみましょう」

(*maị*) *dil kholkar us se bātẹ kar letī* (Pr. *Sevāsadan* 133頁)「(私が) 胸襟を開いて彼に話しておれば…」

āpas mẹ bāṭ lenā「お互いに分かつ」の如き動詞もこれに属する。

27. 特別な場合，自主性，願望，効果的な関心(……の仕方を心得ている)，自主性等を表わす。ある人が家を去って，後にとどまる召使いに，主人の不在中に行なわれなければならない命令を与えるような場合，*lenā* をとった形が適切である。すなわち，召使は命じられたことを監督なしに，ある程度彼自身のために自主的に行なうだろうということである。だから，通常，命令は *lenā* を添えた方がより丁ねいになり，行為者がその命令を自分自身関心をもって，必ずや独力で実行するだろうこと，また彼がそれについて何かをなさねばならないような事柄が彼に属するということも推察されるのである。次の文章では *lenā* は，話しかけられた人が，任せられた仕事についてそれ以上心配する必要なく，その行為がなされようとしていることを暗示している。

Āp niścint rahiye, maị sab kuch kar lṇgā (Pr. *Sevāsadan* 170頁)「ご心配なさらないで下さい，私がきっと全部やりますから」

誰かがある言語を完全に熟達して話したり書いたりすることをほのめかしたい場合に使われる *bol lenā* と *likh lenā* もこれに属する (§10の *bol denā* 参照)。さらに *lenā* は又，こういう行為を記述するためにも使われる——つまり，その行為をなすにあたって行為者は全く彼の願望に従って振舞うことを要求されていること。たとえば，動詞としての *cāhe* を含む文章の後でも，又は譲歩構文の *cāhe* の後でも。

jo cāhe kah lījiye (Pr. *Sevāsadan* 252頁)「何でもお望みのことをおっしゃって下さい」

ise cāhe pūrvasạskār kah lo, par ham to yahī kahẹge ki…(Pr.)[1]「これを前世のしからしめるものといってもよし，だが，我々はこう言おう…」

jīvan kī aur koī paribhāṣā nahī hai, gati ke arth mẹ hī ham use samajh sakte haị… usī ko vikās kah lījiye[2]「人生には他にどんな定義もない。進歩の意味においてのみ我々はそれを理解することができる…それを発展といってもよい」

---

1 PREMCAND: *Karmabhūmi*. 6頁 Ilāhābād: Hindustani Publishing House 発行年不明。

2 JAINENDRA KUMĀR: *Prastut Praśn*. 205頁 2版. Dillī: Pūrvoday Prakāśan 1953 (Jainendra Sāhitya 6).

isliye filhāl cāhe ham carkhā calā lę, *grāmodyog* calā lę, *lekin agar ham in cār-pāc varṣo mę zamīn kī samasyā ko* suljhā lete haị, *to duniyā kā netṛtva ham hī karnevāle haị*[1]「だから今，私達が糸紡ぎ車をまわそうとも，農村の産業をすすめようとも，ここ四，五年で土地問題が解決できるならば，世界を指導することになるのは外ならぬ私達なのです」

この文章のはじめの二つの *lenā* 合成語（calā lę）は願望を示し，三番目のそれ（*suljhā lete haị*）は「精神的な関心をもって，それ故，効果的に解決すること」を意味する。それは大体ドイツ語の 'zu lösen v e r m ö g e n'（解決することができる）又は 'zu lösen v e r s t e h e n'（解決の仕方を心得る）ぐらいに相当する。§25の第七例（*maị ne tīs rupae*…）も同じ意味に解釈できる。さらに対応する関係にある *bol lenā* と *likh lenā*（「話したり又は書いたりできる」＝「話したり又は，書いたりする仕方を心得ている」）も，又たとえば，次の文における *paṛh lenā* もこの意味に解釈してよい。

yadyapi Raṅgīlībāī bhī śāyad hī kabhī kitāb paṛhtī hę, par ḳhat-vat paṛh letī thī (Pr.)[2]「Raṅgīlībāī も本を読むことは決してなくとも，手紙なんかは読めたものだ」

この意味のニュアンスを示す *lenā* 合成語のもう一つの例：

unhęne…joṛtoṛ lagākar 200 *r. kā candā karā liyā thā* (Pr. *Sevāsadan* 148頁)「彼は…策略を用いて，二百ルピーの寄金を人に出させた（彼はそれを使ってしまっていた）」

ある仕事を喜んで引き受けること，つまり自発性の要素も又，*lenā* によって，一つの観念連合から明らかにされる。

vidyārthī klās mę pahle ā gaye to ve jhāṛū lagā lę, *kabhī śikṣak pahle āyā to vah* lagā le, *aisā honā cāhiye* (*Vinobā ke Vicār* 1, 98)「学生達が先に教室に入ってくると彼らが掃除をし，先生が先に入ってくると先生が掃除をする，このようでなければいけません」

kuch log pariśram karne mę hīnatā nahī̃ mānte athavā kuch pariśram kar bhī lete haị (*Bhūdān-Yajña* 46頁)「(肉体的な) 勤労を卑しいと思っていない人もいますし，又，(喜んで) それをする人もいるのです」

これで明らかなように，*lenā* は多くの文脈においてまさしく 'wollen'（欲する）でもって訳しうる。上例の*isliye filhāl*…中の *suljhā lete haị* 表現をそのように（私達が土地問題の解決を欲するなら）理解できようし，又，次の例文もそうである。

kyę, Bhuvan se ek bār kyę nahī̃ pūch lete? (Pr. *Nirmalā* 27頁)「ねえ，Bhuvan に一度尋ねてみてはどう？」（何故君は…尋ねようとしないのか）

しかし，だからといって *lenā* がしばしば 'wollen'（欲する）（他の場合に 'können'（できる））であるように）「である」とはいえない。*lenā* が示すのは，主語が行為を「うけとること」であ

1 VINOBĀ BHĀVE: *Bhūdān-Yajña*. 40/41 Ahmadābād: Navajīvan Prakāśan Mandir 1953.

2 PREMCAND: *Nirmalā*, 24頁 4版. Banāras: Bhārgavapustakālay 1954.

る。うけとることは，精神的な関心又は，没入によって制約され，その結果として，結果に伴なわれ得る。その場合,「…する方法を心得ている」という意味で 'können'(できる) というのである。又それは，行為が自主的にする心構えでなされるということにも存する—このとき 'wollen' (欲する) で訳すのは合理的である。最後に，二つの要素は又，全体の概念又は状況によって示唆されることができよう。うけとることが，ある根拠のない，任意の「自分を抽出すること」であるということもしばしばあるようだ (例えば，§24の第一例 *ārop kar lenā*)。

主語が行為に関してその効果を外に向って導くことなく，おそらくただそれだけとして存在することは次の文で *lenā* によって暗示されている。

mujhe bahut dafā lagtā hai ki maiṇ ghūmne ke sāth-sāth kuch bol *bhī* letā hū, *lekin is se pariṇām kyā hotā hogā*? (*Bhūdān-Yajña* 17頁)「私は遍歴の間，話してみようとも何度か思いますが，この結果はどうなるでしょう」

28. *denā* の場合，その使用の動機が一度原則として分ると，その大部分の使用は我々にとって比較的容易に解明できる。それに反して *lenā* の場合は，どちらかというと我々に馴じみの薄い「中間態」とか，Ātmanepada という概念が *lenā* の使われるさまざまな状況を適応して明らかにされなければならない。基本概念の可能な諸変化は実に多様である。それでも上に述べたことで，*lenā* の使用の主要なタイプをつかんだものと思う。上の記述から明らかになったことは，*lenā* はただ，KĀMTĀPRASĀD GURU が定義しているように (*Hindī Vyākaraṇ* 397頁：*jis kriyā ke vyāpār kā lābh karttā hī ko prāpt hotā hai us ke sāth ,lenā' kriyā ātī hai*[18])，その行為が主語の利益において又はその便益のため起るということだけを意味するのではなくて，そういうことはむしろ，*lenā* の多様な機能のうちの一つにすぎないということである。その他の点でこれまでの文法がいっていることは，大部分は正しいとしても，余りにも一般的であり，又，すべての場合にはあてはまらないのだ。他の助動詞の場合と同様，*lenā* については，さまざまな使用の型，すなわち，使用されるさまざまな典型的な場合を吟味することによって，補足し，説明することが肝要である。

III. jānā

29. *jānā* はさまざまな構文の中で，助動詞として用いられる。ここでは，語幹と結ばれるものに限定しておきたい。語幹と結ばれる場合の *jānā* の果す役目を知るためには，他動詞との結合と,自動詞との結合を分けて別々に観察することがこの上なく重要である。しかし,私の調べた二十一冊の文法書や学習書のうち,ただ GREAVES のが，一つの観察を加えているだけである，——その観察は,確かに文章の本質へと前進するものではないが，しかし少なくとも,他動詞との結合と，自動詞との結合との区別を可能にしている。そのわけは，GREAVES は，自動詞の場合

の *jānā* の働きを受動態の場合の *janā* の働きと同じ水準においているからである(309頁)。この外の本はすべて，*Hindī Śabdasāgar* も Vale の研究もこの区別をみとめていない。従って，*jānā* に対する文法上の説明は，全く特に不十分で誤ちの多いものである。特に，*jānā* はすなわち行為の完全さ又は完結性[1] を示すという多くの他動詞についてだけ適用するところの推定は，しばしば，すべての他動詞について一般化されるだけではなく，GREAVES を除くすべての人は，自動詞にまで転用するのだが，しかしこのことのために，*jānā* の果す役割をより正確に知るための道は，はじめから遮ぎられるのである。

a） 自動詞と結ばれる *jānā*

30. 自動詞の語幹と用いられる *jānā* の機能は，それでもかなり容易に明らかにできる。つまり，単一で用いられるのと *jānā* と結ばれて用いられるのとでは一つの小さな意味の相違が存在するという動詞が若干あるのだが，肝心なことは，このちがいを定義し，それから，見出されたものが他の動詞についてもあてはまるかどうかを観察することである。

全く明白なのは（必ず訳文に現れてくるので），*honā* と *ho jānā* のちがいである。前者は「である」，従ってある状態を示すのに対して，後者は「となる」，従って一つのでき事を示す。この観察を今，外の動詞について確かめることにする。その意味が（英語の *sit* のそれにちょうど似て）状態を示すものと動作を示すものとの間の固有のあいまいさにある動詞がいくつかある。たとえば，*basnā*「住んでいる」と「住みつく」又は「植民する」；*baiṭhnā*「座っている」(*doṇ pās-pās baiṭhte the*「二人は((学校で)) 隣り合って座っていた」) と「座る」(*baiṭhiye*「お座り下さい」)；*ṭhaharnā*「とどまっている」と「とまる，立ちどまる」。（同じように，*rakhnā* についても，状態と行為を示す意味があるのはすでにみた。）ところでしかし，*bas jānā* は明白に「住みつく」あるいは，ある場所が主語のときは「植民される」という意味であり，*baiṭh jānā* は「座る」，*ṭhahar jānā* は「とまる，立ちどまる」ことである。従ってこの三者すべての場合，単一の動詞には必ずしも明らかには属していないところの動作の概念が *jānā* によって表わされ，展開され，説明され，正確に規定され，一義化されるのである。（同様に，*rakhnā* の場合，動作の概念は *denā* によって，又は，その動作が主語へと向う場合は *lenā* によって展開され又は一義化される。）*sonā*「眠る」と *so jānā*「眠りこむ」，*rahnā*「つづく，いつもある」と「残る」のような対も同じように判断できる。「眠る」も又，人が欲するならば，一つの行為ではあるが，それは持続的なものであるから，状態の性格をもっている。これに対して *so jānā*「眠りこむ」は，ある新しい状態への移行であり，従って一義的に一つの行為である。*rah jānā*「残る」は一つの状態として把握することができるが，しかしそれは，先行している状態の変化に応じて

1 KELLOGG 260頁: *completeness*; KĀMTĀPRASĀD GURU 397頁: *purṇatā*; BARANNIKOV 129頁: *zakončennost'*. VALE は79頁以下で，まず *jānā* と共に作られるいわゆる「完結」を列挙し，それから「強調」と「突然性を示す強調」(！) を挙げている。

起こる一つの状態である（それよりずっと前に，何かがとりさられ，何かが「残って」いるのである），従って，純粋に状態性を表わす *rahnā* と反対に，*rah jānā* の意味には一つの明らかな行為の要素が含まれている。

いわゆる「完全さ」についてはこの場合ほとんど余り問題となり得ない。それどころか，それと全く逆のことが確証されねばならないのである。すなわち，ある状態を述べる単一の動詞は，ある状態への途中にいること又は，（*rah jānā* の場合）一つの新しい状態の始まりを示すところの複合語よりも，明らかにより完全なことをあらわすのである。

31. 単一動詞と *jānā* の合成語との間に，我々にとってきわ立った意味の相違が存在する六つの動詞について今確かめたことは，次のことを観察することによって一層正しいことが分る。すなわち，*jānā* は，つねに明らかに一つの行為を示す動詞と同じく，ひじょうに頻繁に現れるということ――どれほど頻繁かというと，行為が外に向って行くときの使役や作為動詞について現れる *denā* や，外在的又は内在的な再帰性をあらわす動詞についての *lenā* と同じほどである。*denā* が状態又は動作の概念と対比して，動詞にすでに無制限に内在する行動又は作用の性格を目立たせるように，又，*lenā* が文の中にすでに表現されているか，又は行為の性格と共に与えられている再帰性をもう一度言葉の手段で広げるように，その意味によって，すでに多くの自動詞に内在する進行の概念が，*jānā* によって表わされるのである。そして，*denā* や *lenā* と語幹との結合の場合と同様，*jānā* との合成語も「強調」はほとんど示されないのである。何故なら，「行為」又は「作用」，「主語の関わり合い」とか「でき事」等の範疇としてはもはや展開し区別しないところの文章論的形式要素が附加されることは，現に起こっている現象とか又は，起ころうとしている現象の強調表現ではない。*jānā* は原則として，でき事を表わすすべての語と結合できるので，幾百通りもの例は容易に挙げることができようが，私が無選択にあげた若干の例で十分とする。

ā jānā「来る」，*chā jānā*「広がる」，*mil jānā*「会う」，*khul jānā*「開く」，*ṭūṭ jānā*「こわれる」（自動詞），*gir jānā*「落ちる」，*baṛh jānā*「増す」，*ban jānā*「成る」，*ghabrā jānā*「困惑する」，*akhal jānā*「不快になる，傷つく」

32. 又，自動詞と結合される *jānā* ができ事それ自体を意味することは，*jānā* のもとの意味，「行く」からも容易に理解できる。語幹は，*denā* と *lenā* の場合と同様この場合も又，先行性を示すという本来の機能をもたない。これに反して，でき事の内容を示す主動詞と，「でき事」という範疇を示す助動詞―両者は全く同時刻に行なわれる―の概念とのある密接な融合がここでも起こるのである。

33. でき事の概念の明白化によって，表現は一層限定化され，正確になり，輪郭がとられる

——ちょうど *denā* の場合に，他動詞性の概念の拡大によってそうなるように。又，これによって通常，意味のニュアンス——訳文によって把握できる——も明らかとなる。

vah ek kṣaṇ soctī hai: is mẹ baiṭhū. *ant mẹ vah niścay kartī hai:* baiṭh jāū (Pr. *Nirmalā* 8頁)「彼女は一瞬これに座るべきだろうかと考える。ついに，座ろうと決心する」*baiṭhnā* が助動詞を伴なうと伴なわないとにかかわらず，動作（「座る」）を表わし，状態（「座っている」）を表わしていないことは文脈からして明らかである。しかし，助動詞のつかない方は「～すべきだろうか」という接続法が優柔不断な思考を示すことができるのに対し，助動詞のついた方は「～しょう」という決心（*niścay*）を表わすことができる。何故なら，決断意識にあっては動作が（それがただちに起こらなければならないので）より一層確実に思い浮かべられるが，優柔不断な思考にあっては，それほど正確な形ではなお考えられないからである。

b） 他動詞と結ばれる *jānā*

34. 他動詞と結ばれる *jānā* の機能は，そのもとの意味からしらべなくてはならない。その際，語幹の働きにも又，注目しなくてはならない。このことを知るためには，語幹＋*jānā* の過去形の構造を，*denā* や *lenā* の合成語における過去形の成りたちと比較することが有益である。*denā* と *lenā* の場合は，過去形において主語の構造はつねに主動詞に応ずる。圧倒的に多数の使用例では，主動詞は他動詞である。従って主語には °*ne* 形がとられる。しかし，主動詞が自動詞である少数の場合（§18と§24の *ho lenā* と *ā lenā*）には，過去形において主語は直格形をとる（例えば，*ve cal diye, vah mere pīche ho liyā*）。この使用で，*denā* と *lenā* がもはや本来の動詞としては全くうけとられていないことが示される。何故なら，*denā* と *lenā* の定まった形にもかかわらず，構文を決定するものは *denā* と *lenā* ではなく，語尾のない主動詞だからである。主動詞と助動詞は完全に一つの単位となっているのである。他動詞の語幹と結ばれる *jānā* の場合はそうではない。この場合過去形において主語はつねに直格をとる（例えば，*vah kah gayā*）。だから，構文を決定するのは助動詞である。これの意味はしかし，この場合には主動詞と助動詞の結びつきが，*denā* や *lenā* の場合ほど，あるいは又，自動詞と結ばれる *jānā* の場合ほど緊密でないということである。何故ならここでの助動詞は，合成語の構成をなお決めるという程度において一つの独立を保っているからである。だから，*denā* や *lenā* と類推して，例えば *kah jānā* の場合「言う」のと「行く」のが同時であるとか又は，*kar jānā* の場合「する」のと「行く」のが同時であると言うことはできない。何故なら，「言う」と「する」は他動詞であるが，「行く」はここでは（その合成語においても），その自動詞性を維持しているからである。だからここでは，「する」と「行く」が一時的に分離すること，つまり「なし終えてから去ってゆく」というもとの意味から出発しなければならない。大ていの場合，このもとの意味はずっと保持されつづける。例えばよく使われる *le jānā*「とって，そしてそれから行く」＝「もち去る」。しかしここでは，もとの意味が変化し，助動詞が主動詞の意味のみを修飾して，それと

並んである特有な意味の機能を維持しないような場合のみを調べることにする。

35. 「何かをなし終えた後，去ってゆく」という意味は，行為から間隔をもつということである。それによって，他動詞と結ばれる *jānā* の果す役割の普遍的で，あらゆる個々の場合を含めた規定が加えられるのである。もしこのことが，「*jānā* は主動詞に *udalenije**⑲の概念を与える」(*Hindustani* 129頁) との BARANNIKOV の観察（結局のところ，説明もなく，他動詞と自動詞の区別も述べられていないが）の意味であるならば，彼のいうことは確かに正しかろう。

間隔をとることは，実にさまざまな方法で実現されることができる——空間的，時間的又，何らかの心理的な方法で。さらには又，「行為の後去ってゆく」という概念が変化し，さらに発展してある結果に帰するという意味の使用もある。

36. まず，すでにその意味に従って何らかの間隔をとることを表わすような他動詞と結ばれる *jānā* がひじょうに規則的にあらわれる。従ってこれまでみてきたすべての動詞について考察した事柄は，他動詞と結ばれる *jānā* についても該当するのである。つまり，この場合の *jānā* は主動詞の意味に含まれている一つの要素を発展させ，明らかにし，表現できるものとするのである。例：

choṛ jānā「後に残す，後に残しておく」(*choṛ denā*「放棄する」「去る」と比較せよ)；*ṭāl jānā*「拒否する」，「堪える」等；*bacā jānā*「用心する」という意味で「遠ざけておく」例：*praśaṣā kā ḳhatrā bacā jānā*[1]「賞賛されることの危険を警戒すること」；*kannī kāṭ jānā*（直訳）［縁(ふち)を切り離す」＝「おくびょうに逃げる」；*himmat hār jānā*「勇気を失う」（このでき事のもう一つ別のニュアンスは *baiṭhnā* によって，正確にされることができる。§67参照）；*inkār kar jānā*「拒否する，断わる」；*vacan de jānā*「約束する」；*bhūl jānā*「忘れる」；*zabt kar jānā*「あきらめる」；*maun* (*cup, cuppi*) *sādh jānā*「黙りこむ，物を言わない」

これらは空間的，時間的そして精神的な間隔をとることに対する例である。「精神的な間隔をとること」は，目的的でなかったり，又は不本意であったり (*himmat hār j., bhūl j.*)，又は故意で (*inkār kar j., vacan de j., maun sādh j., zabt kar j.*) あり得る。「約束する」又は「あきらめる」が *jānā* で組みたてられると，それは過去から距離をおくことを意味し，一つの新しい抑制がみられる。

37. 誰かがある仕事から「離れ」，間隔をとることはすなわち，少なくとも，彼がその仕事を，完全には終ってないとしても終らせて，完了した，ということである。*jānā* と結ばれる多くの他動詞には KELLOGG の定義 'finality' (260頁) が全くよくあてはまる。「離れてゆく」こ

1 JAINENDRA KUMĀR: *Sāhitya kā śreya aur preya*. 293頁. Dillī: Pūrvoday Prakāśan 1953 (Jainendra Sāhitya 7).

とはさらに，その行為をも通りぬけて行き，何らかの意味でその行為が完成されることを暗に示すことができる。他動詞の一部には，しばしばすべての *jānā* 合成語についてのべられている定義（KELLOGG：*completeness*, KĀMTĀPRASĀD GURU 及び *Hindī Śabdasāgar*：*pūrṇatā*）が実際に当っている。完成されることは，目的語が行為と全く関わっている事が本性でもあり得る。これには，たとえば飲食を示す動詞が属する。

khā jānā「食べ尽す」，*nigal jānā*「飲み込む」，*pī jānā*「飲み干す」

これらの動詞は又，*lenā* とも合成されるが，その場合は，自分のところにとることという意味の要素が精確に表現されている。

次の若干の例文で，*jānā* が他の動詞との結合でも暗示するように，行為が完全に，徹底的に，根本的に又は首尾よくなされることを示そう。これらの概念はしばしば，副詞的な使用を通して，あるいは形容詞又は，目的語を示す語の選択によってすでに表わされている。助動詞によってのみ表現されることもしばしばある。

tathya…vyakti-jīvan ke prasār mẹ gahrī *likẹ kāṭ gayā* (*hai*)[1]「事実が…人の生涯に深いわだちを遺してしまった」

Paṇḍit us ko pūrī tarah *jhakjhor gaye the*「パンディットは彼を完全にゆさぶったのだ」

ある批評家が書いているには，大ていの詩人の作品はその流れの中で時間によって洗い流される。しかし，その作品が忘れられても批評家はこういう——*apne yug mẹ ve apnā kām kar* hī *jāte haị*「自分達の時代に彼らはすでに自分達の影響を及ぼしている」つまり，だから彼らは成果を得ているわけだ。

本の校閲をしたある編集者についてこういわれる：*ve use* pūrī tarah *dekh gaye haị*「彼はそれに完全に目を通した」

in mūl siddhāntọ ko ab hamẹ dekh jānā hai[2]「これらの根本原則を今や私達は（詳しく）観察しなければいけません」

yadi Śāntā yahą̃ na hotī to kadācit Sadan apne man ke bhāvọ ko prakaṭ karne kā sāhas *kar jātā* (Pr. *Sevāsadan* 281頁)「もし Śāntā がここにいなかったら，おそらく Sadan は勇気をもって（すなわち，効果的に奮起して）自分の気持を打明けたことだろう」

Madansiḥ…Padmasiḥ ke marm-sthān par aisā vār *kar gaye ki vah rāt-bhar taṛapte rahe* (Pr. *Sevāsadan* 313頁)「Madansinh は Padmasinh の急所をこれほど激しくついたので，Padmasinh は夜通しもがきつづけた」

saccā *bhakt śūnya kī upāsanā se bhī phal pā jāegā* (*Sāhitya kā śreya aur preya* 163頁)「真の信奉者は，無の崇拝からさえ，益を得るだろう」

---

1 Ajñeya: Jay-dol (Naī Dillī: Pragati Prakāśan 1951) 11頁.

2 VINOBĀ BHĀVE: *Gītā-Pravacan*. Haribhāū Upādhyāy によるヒンディー語訳. 18頁.（5版. Naī Dillī: Sastā Sāhitya Maṇḍal 1952.）

38. 知覚動詞の場合，*jānā* は行為が完全又は効果的であることを暗示することができる。*jān jānā*「知る」; *pahcān jānā*「識別する」; *samajh jānā*「理解する」等，下記参照；*tāṛ jānā*「推測する」; *sīkh jānā*「学ぶ」; *paṛh jānā*「通読する」; *paricit karā jānā*「知らしめる」; *sikhā jānā*「(完全に) 教える」

paricit karā denā が並行して現れる *paricit karā jānā*，又，当然 *sikhā denā* もそれと並んで可能な *sikhā jānā* を例外として，上にあげた動詞はすべて，*lenā* との結合でも現れる。*jānā* と *lenā* の両合成語間にある意味のちがいは，あらゆる動詞とそれらが使われるあらゆる場合に対してその都度助動詞の用法を完全に説明するか，又は明白に規定するであろう一つの形式によっては記述されることはできない。それでもこういうことはいえる。つまり，*lenā* はしばしば，とり上げることと又は受けとることという概念に相当し，*jānā* は浸透性という概念に相当する。このことを，*samajh lenā/samajh jānā* の一対をただ一つの例として示しておきたい。

samajh lenā の意味は，承知する，仮定する（ある場合を，従って多少共任意的に），～と信ずる，見分ける（ある誤ちを），考慮に入れる，‥を熟慮する（‥がどういうことかを），ということであり，いいかえると，受けとるとか引き受けるとかいう態度において，ある状況を現実化することである。例：

ab tak Suman dhairya ke sāth yah sārī vipattiyą jheltī thī, us ne samajh liyā thā *ki ab isī narak-kuṇḍ mę jīvan vyatīt karnā hai to in bātę se kahą tak bhāgą* (Pr. *Sevāsadan* 113頁)「これまで Suman はこのあらゆる苦労にじっと耐えてきた。彼女はこう思っていた——今この地獄穴で生涯を送らねばならないのなら，これらの事からどこまで逃がれようか」

samajh jānā ki…もしばしば「…と考える」と訳してよいが，しかしここで大事なのは *samajh lenā* のように理解しつつとり入れること，又は故意に受け入れるということではなくて，ある状況の解釈，すなわち，認識に即しつつ，ある状況に浸透すること又，所与の事実から推量することである。例：

…*vah ro paṛā. Suman* samajh gaī *ki mere vah vākya akhar gaye* (Pr. *Sevāsadan* 104頁)「…彼は（不意に）泣き出した。Suman は，自分の言ったあの言葉が彼の気に障ったのだろうと思った」

同じ意味で *samajh gayā*「みつけた」「真相を見つけ出した」といい，又ひじょうにしばしば *samajh jānā* は，「深い意味でいろんな関係の中へ浸透していくこと」を意味する動詞に適合している *āśay* という語を目的語にとる。一例：

Subhadrā ke prati un ke hṛday mę ek nayā prem jāgṛt ho gayā…unhǫne vimal, viśuddh bhāv se use dekhā. Subhadrā is kā āśay samajh gaī *aur us kā hṛday ānand se vihval gadgad ho gayā* (Pr. *Sevāsadan* 275頁)「彼の心に Subhadrā（妻）に対する一つの

新しい愛情が目覚めた…彼は濁りのない純な表情で彼女をみた。Subhadrā はこの（彼の表情の）意味を理解した，そして彼女の心は喜びで小躍りせんばかりに感激した」

次の例では，ある人が彼自身の精神状態を分析し，それによって一つの確固とした結果に到達することが，*samajh jānā* によって表わされる。

Amar ne unmatt hokar kahā: ‚maị badgoī se nahị ḍartā, Sakīnā, rattī bhar bhī nahị.‘ lekin ek hī pal mẹ vah samajh gayā: *‚maị bahkā jātā hū̃.‘* (Pr. *Karmbhūmi* 90～91頁)「Amar (kānt) は興奮していった—私は中傷など恐れない，Sakīnā よ，全然恐れない—しかし次の瞬間彼は（娘と自分を）欺いているのに気がついた」

ここに現れる二番目の *jānā* の合成語（*bahkā jānā*）は§36に分類してよい。「欺くこと」は現実や事実からある距離をおくことである。これらの例は知覚動詞の，*lenā* と *jānā* との結合を説明するのに十分であろう。この方法のさらにすすんだ研究は，一つの詳細な文体的又同意語論的研究に属し，その研究成果は又，語彙的研究の一部にもなるだろう。

39. 完成性の概念は，すでに上で示したように，必ずしも必要欠くべからざるものではなく，「離れてゆく」という概念を表わす助動詞の使用と常に結びついているのである。終えられた行為は未完成でもあり得るし，中止されるが，しかし最後に中止されることもあり得る。さらに，ただ終結又は最終のことだけが表わされ，完成性の問題は全然関係しない場合もある。さしあたって意味されることは，状況又は附随的表現から明らかであろう。例：

jo likhā likh hī gayā *jaise ciṭṭhī likhī jātī hai* (*Sāhitya kā śreya aur preya* 289頁，テキストには*likhī jātī hai* とあるべきところを，誤って *likh jātī hai* とある）「私は自分の書いたことを，手紙を書くように書きなぐった」

maị itnī der tak aur itnā sạskṛt-sāhitya ke adhyayan se nikle natījẹ par kah gayā *aur to bhī maị jāntā hū̃ ki vidvān log samjhẹge… ki jo kuch maịne kahā hai vah* bahut kam *hai aur* adhūrā *hai*[1]「私はこれほど長時間も，又，サンスクリット文学の勉強から得られた結果についてこれほど多くを話したが，それでも私は，学者達は私のいったことはすべてひじょうに少なくて不完全なものだと思うだろう…ということを知っている」

Babūrāv Ahmadābād kī milẹ mẹ bhī kām kar gayā hai「Babūrāv（1955年3月にネルー暗殺を試みた男）はかってアーメダバードの工場にも働いていたことがある」

ye bhāī 6 *mīl kī dūrī se āye the. apnī* 6 *ekaṛ zamīn mẹ se* 1 *ekaṛ zamīn mujhe* de gaye…*ek ġarīb ātā hai aur chaḥ mẹ se ek ekaṛ* de jātā hai. *yah huā na huā ki ek dūsre bhāī, jo kāfī dūr se āye the, bāvan ekaṛ* dekar cale gaye (*Bhūdān-Yajña* 18頁)「この友は六マイル離れたところから来て，自分のもっている六エーカーの土地のうち一エーカーの土地を私に委ねました……ある貧しい人がやってきて六エーカーのうち一エーカー

1 R. Prasād: Sạskṛt kā adhyayan (Paṭnā: Śrī Ajantā Press Ltd. 発行年不明) 121頁.

を譲渡します。するとまもなく，ひじょうに遠くからやってきた別の人が実際五十二エーカーの土地を与えたのです」

完成性又は不完成の如き概念は，最後の例文の三つの行為の場合には，平行して存在している。しかし，与えることが最終的であること，又与えるということが譲与であるということは *jānā* によって明らかにされるのである。与える人が寄付の後，実際に「立ち去る」ので，もとの意味が同時に現れ，最終性がここで，文字通りの直訳，「彼は与えた，そして立ち去った」によっても表現され得るだろう。三番目の場合は，かなり大きな寄付行為が動詞表現の強化を誘発したのである。つまり，語幹の代りに，*-kar* のついた語幹が，又単一の *jānā* の代りに補形的な *calā jānā* が用いられている（§82の *jānā* との強調，参照）のである。

40. 「ある行為をなして，それからすぐに立ち去る」のは，迅速性を意味することができる。*jānā* はしばしば「迅速性」（*śīghratā*）の概念をよびおこすとの KĀMTĀPRASĀD の観察（*Hindī Vyākaraṇ* 397頁）はこの点で注目に値する。特に，その行為がただ中止されているものと理解され，完全に終っていると把握されていないときに，迅速性の概念が現れることができる（§39の最初の例文参照）。*samajh jānā* が多く使用される際（§38）も又，「浸透性」の概念と並んでこの概念が，*jānā* の使用の動機として共に作用し得るだろう。さらに又，その性質に従って，つねに迅速に推移するという行為があって，そういう行為を説明する動詞はひじょうにしばしば，*jānā* と組み合わされることがある。「触れる，接触する」という意味の動詞 *chū jānā, sparś kar jānā* がとくにそうである。

ある行為からの内面的精神的間隔は，その行為が表面上は容易になされるということまで通じることができる。このニュアンスも又，*jānā* によって強調されるのである。例：

svābhāvik mṛtyu huī hotī to sambhavataḥ un ke śatru bhī ākar cār ąsū bahā jāte (Pr. *Sevāsadan* 238頁)「自然な死を遂げたのだったら，おそらく彼の敵さえもが来て，いくらか涙を流したことだろう」

ここでも又，*jānā* が同時にもとの意味ももっており，直訳でも行為の表面的なることが述べられよう：「いくらか涙を流したことだろう，そして再び立ち去ったことだろう」

jis ne jo bāt sujhā dī, mān gayā (Pr. *Sevāsadan* 69頁)「その人が提案したことを（すぐに）信じた」

41. ある行為との間隔は又，人が何らかの意味で遠くへ行きすぎることによっても とることができる。この観念も又，*jānā* によって強調されるのである。例：

maiṇ zyādā kah gayā (*Sāhitya kā śreya aur preya* 288頁)「私は多くを語りすぎた」

Madansiṇh ke sambandh mę…ve us se bahut adhik kah gaye jo vah kahnā cāhte the (Pr. *Sevāsadan* 265頁)「Madansinh について彼は自分が言おうと欲していた以上のこと

を言った」

42. 「遠くへ行きすぎる」という概念から，まさに多くの場合が説明されうる，——どういう場合かといえば，何らかの意味で「偽り」と考えられ，欠陥のある，不適当な，無分別な，等の行為と結ばれて *jānā* が用いられるときである。

RĀMCANDRA VARMĀ はその著 *Acchī Hindī* で，彼が誤りとみなしている言葉の用法を記述する際に，全く規則的に助動詞 *jānā* を使っている。例えば，*kah jānā* と *likh jānā* における *jānā* である。しばしば，不正確の観念は，一つの副詞使用以外によっても表わされる。例：(154頁)

kuch log bhram se kuch kriyā-viśeṣaṇo kā prayog prāyaḥ sajñā ke samān kar jāte haiṭ「いくらかの副詞を誤って名詞のように使う人達もいます」

さらにもう一つの例：

ある批評家が文学史家である RĀMCANDRA ŚUKLA について書き，彼の見解が RĀMCANDRA のそれと異なること，さらにつづけて，RĀMCANDRA が歴史を純粋にバラモン的見地から眺めていることを観察し，そして RĀMCANDRA の個々の見解を挙げてからこう言う：*tathyo kī kamī ke kāraṇ aisā* kah jānā *koī asambhav bāt nahī hai*「事実が欠けているので，このように主張することは不可能なことでは全くない」

kah jānā はここでは，感情を強調して「主張すること」によって示し得るような観念のニュアンスを表わしている。一方同じ *kah jānā* は他のところで，感情のない，ある有効な言葉も示すことができる。例えば，*yah vākya Jñāneśvar kah gaye haiṭ*「これは Jñāneśvar のいった言葉だ」において，*jānā* は単に，行為からの時間的な間隔を強調しているように思える。次の例文でも，*jānā* の使用は感情にもとづくものである。

pāścātya lekhak paṛhā gaye *ki Hinduo ke yahā itihās likhne kī koī paramparā nahī thī*「西欧の作家達は，ヒンドゥ教徒達には歴史を書く伝統が全然なかったことを学んだ（又は主張した）」

もちろん「西欧の」作家達の見解は誤りである。

ある雑誌の報告にこういう文章がのった。女性外交官の VIJAYA LAKṢMĪ PAṆḌIT がニューヨークで，ガーンディーの原則は新しいものでないと語った話題——報告者はそれを正しいとは認めていないのであるが——についての記事である。

yah bāt Śrīmatī Paṇḍit kis arth me kah gayī?「このことをパンディット夫人は，どの意味で主張したのか」

jānā との合成語における，距離をあらわす動詞は従って次のことを意味することができる。すなわち，その言辞は浅薄で無思慮で早急で，従って誤りである。——いく分誤っていることを表わすための *jānā* の例をさらにあげると：

log pravāh mẹ ākar ġaltiyą̃ kar jāte haį (*Bhūdān-Yajña* 20頁)「人々は絶えず誤ちをおかします」

ḍarnevālā mauqe par aise bure kām kar jātā hai ki us ko hī bād mẹ tājjub hone lagtā hai[1]「恐れる人は，折にふれ，自分自身後で驚くような悪い行ないをするものです」

IV. ānā

43. でき事の概念を明らかにするために，そのでき事が「来るもの」としてとらえられ，その行為が，文脈で話題となっている人や物にふりかかり，あるいは接近してくる場合に，*jānā* の代りに *ānā* が用いられる。従って，運動の動詞の場合に，それが「離れてゆく」のでなく「こちらへ来る」ときに *ānā* が現れるのである。例：

lauṭ ānā「もどってくる」; *utar ānā*「降りてくる」; *nikal ānā*「出てくる」; *manuṣya ke hṛday mẹ devatā kā vās honā cāhiye, par āj ke yug mẹ paśutā ghus āyī hai*「人間の心の中には，神性が宿らなくてはいけません，しかし今日の時代では獣性が入りこんできました」

ここで *gayī* の代りに *āyī* となっているのは，文章が「人間の」観点から話されているからである。慣用的な *ānā* との合成語は次の通りである。

ą̃khẹ bhar (又は *ḍabḍabā*) *āį*「両の目に涙が一杯たまった」; *buḳhār* (*jvar*) *caṛh ātā hai*「熱が出る」; *ban ānā* (=*ban paṛnā* §53)「可能である，うまくゆく」; *yād ho ānā*[2]「思い出される」等。

これらすべての場合にはでき事は同時に「来ること」である。自動詞又は他動詞について *ānā* の現れる場合，しばしば実際に二つの行為が存在し，二つの行為がすぐ後から連続してなされ，かつまとまった意図でなされることによってのみ一つの単位として結ばれるのである。例えば，*le ānā*=*lānā*「とってからこちらへ来る」=「もって来る」; *ho ānā*「…からこちらへ来る」(文字通りには，「…へ行って，来る」; 場所を示すものは，後置詞のつかない叙格である。) そして *rah ānā* は斜格をとる。

do sāl Vilāyat rah āyā hą̃ (Pr. *Sevāsadan* 251頁)「二年間私はヨーロッパにいました(そして今はここへ帰ってきています)」

44. 他動詞に *ānā* が現れるとき，主動詞と助動詞「来る」の概念が，ちょうど他動詞と結ばれた *jānā* の場合と全く同じような方法で，融合して一つのまとまった概念となることがしばし

1 Vinobā Bhāve: Śāntiyātrā (Naī Dillī: Sastā Sāhitya Maṇḍal 1953) 62頁.

2 おそらく，*yād ā jānā* の改まったもの。(§45)

ばある。すなわち，話し手が，行為者がその行為に従って実際に具体的に「去った」のではなくて，ちょうど今述べた状況からみれば「こちらへ来た」又は以前の場所に「戻ってきた」ということについて考える場合，その話し手は，間隔，終結，完成等を表わすために，反対の場合ならこれらの概念を表わすであろう *jānā* の代りに *ānā* を用いるのである。何故ならインド人はひじょうに具体的に物を考え，「行く」と「来る」の区別をいつも鋭くするからである。特に，一人称において，*jānā* の代用が *ānā* によってひじょうに頻繁に現れるのは，話し手がそれ自体からみていつも「ここに」いるわけであり，ある以前の行為から「こちらへ」来るからである。このような結合においては，*ānā* は，ちょうど「中間態」の *lenā* が強調的に「活動的な」*denā* に対応するのと全く同じく，助動詞 *jānā* に対応するのである。*ānā* が *lenā* ほど頻繁に用いられないのは，一面では，*jānā* との他動詞の合成語が又，*denā* とのそれほど頻繁でないということ，他面では，主文における自動詞の場合，ただ運動の動詞のみが「行く」と「来る」の区別を暗示するということと関係がある。——例：

(*maṇ*) *vacan de āyī hū* (Pr. *Sevāsadan* 118頁)「(私は) 約束をした」(§36.の*vacan de jānā* を参照)

maṇ apne kiye kā phal bhog āyā hū (Pr. *Sevāsadan* 166頁)「私は自分のしたことの報いを (最終的に) 贖った」

abhī us se kah āyā hū ki mujhe vivāh karnā manzūr nahī (Pr. *Nirmalā* 25頁)「今しがた，(息子の) 結婚をさせることは承服できぬと，(最終的に) 彼はいってきた」

us yug ko ham pīche chor āye haṇ「その時代を我々は後に遺してきた」

これらのすべての例では，*ānā* は行為又は最終的に有効なことからの間隔の表現であって，*jānā* の代りに *ānā* が用いられているのは，話し手が，彼が彼の言う行為から彼のいる状況へと「やってきた」と考えているからである。

三人称の場合の例：

(*vah*) *sārā gāv chān āyī* (Pr. *Mānasarovar* 5, 3)「彼女は村中をくまなく (徹底的に) さがした」(そしてちょうど今述べた状況へともどってきた)

45. 今日の文献では，*ānā* と自動詞の語幹との結合が (他動詞と同じように) 非常に頻繁にみられるようになった。今日，とくにますます，出来事が，誰かに「接近してくる」ものととらえられることが多くなったようだ。JAINENDRA KUMĀR から二つの例をあげると——(その中では，慣習的な標準から判断すると，*ānā* の使用はすでに全く異常である)。

tab svāsthya-lābh ke lie us rog kā nivāraṇ zarūrī ho ātā hai[1]「それで，健康を得るために，その病気をなくすことが大切となる」

rah-rahkar śāyad kisī purānī bīmārī kī vajah se ākh ke pās kī khāl sikuṛ ātī hai

1 JAINENDRA KUMĀR: *Pūrvoday*. Dillī: Pūrvoday Prakāśan 1950. (Jainendra Sāhitya 1). 158頁.

(*Sāhitya kā śreya aur preya* 179頁)「繰り返し繰り返し，おそらくは以前わずらった何かの病気のため，目のまわりの皮膚がたるんでくる」

しかし，多くのインド人の言葉の感情は，*ānā* の使用の過度の拡大を *jānā* を犠牲にしては，承知していない。RĀMCANDRA VARMĀ は *Acchī Hindī* (159頁) でこのことを酷評していっている——「どこを見ても，至るところでこの動詞がむりやりはめ込まれる」。そして彼は，実際今日，文学にしばしば出くわすところの一連の結合語を誤りとしてあげている。例：

vah ghabṛā āyā「彼は狼狽した」; *vah hąs āyā*「彼は笑った」; *vah ro āī*「彼女は泣いた」

今日のヒンディー語のこの傾向をもっと正確に知るためには，個々の作家の言語慣用をとくに調べることが必要であろう。

46. 現在分詞との結合において，*ānā* は過去のある時点からより近い時点又は現代に至るまでのある行為の連続的な進行を示す。この結合例はこれまで文法家達によって，望まれているほどには明らかにされていない。KELLOGG は不十分な指示しかしていない (§ 754, le 446頁)。従ってここでは，それが分詞構文としてこの論文の範囲には入ってこないけれども，それでも若干の例を手がかりとして主要形式について簡単な概観をしておこう。

a) 時代を通じて「由来した」と想像することのできる何かが主語である文章が出発点で，その際，運動又は時代によってひきのばされることが助動詞 *ānā* によって表わされ，そして付加された *calā* によって通常一層印象的に表わされる。例：

yah tanāv ab tak calā ā rahā hai「この緊張は今なおつづいている」

(*yah*) *prathā prācīn kāl se calī ātī hai* (Pr. *Kuch Vicār* 22頁)「この風習は昔からずっとつづいている」

b) 意図された意味が *ānā* 以外の動詞を要求するとき，その動詞は現在分詞であらわれ，文法上，主語と一致する。さらに加えて，*ānā* は助動詞として，付加された *calā* と共にしばしば一定の活用をする。さらに，現在分詞に *huā* がつけ加えられる。*ānā* は文脈によって要求される時相にあらわれる。例：

Hindū sadaiv yah viśvās karte ā rahe haị「ヒンドゥー教徒達は，いつもこのことを信じてきている」

Padmasịh use bhī ṭālte āye the (Pr. *Sevāsadan* 267 頁)「Padmasinh はそれ (提案) をもずっとしりぞけたのだった」

jo bāt sanātan se hotī calī āyī hai (Pr. *Sevāsadan* 156頁)「古くからつづいてきていること」

Bhāratīya sąskṛti sārvabhaumarūp se Bhāratīyǫ kā kalyāṇ kartī huī calī āyī「インド文化は，最高のやり方でインド人達の至福を得させてきた」

V. *paṛnā*

47. *paṛnā* は *denā, lenā, jānā* ほどには普遍的に使われるものではない。——*denā* と *lenā* はすべての，あるいはほとんどすべての他動詞と結ばれ，*jānā* はすべての自動詞と結ばれることができるが，さらに *denā* と *lenā* については自動詞との若干の結合，又 *jānā* については他動詞との多くの結合が加わってくる。*paṛnā* の意味を調べるのは前の三つの助動詞ほど容易ではない。他の三つの助動詞の場合よりも重複表現が稀だからである——それがあれば，*paṛnā* の機能を規定するのは容易なのだが。

paṛnā は「落ちる」という意味だが，大ていの場合，比喩的な意味（例えば，誰かにふりかかる日光とか義務とか責任について）のときとか，ある種の型通りの使用（例えば，投げられるさいころについて）のときのみ，その「落ちる」という意味をもっている。名詞と結ばれる場合，それはしばしば *ḍālnā*「投げる」に対応する自動詞となり，「…に落ちこむ」，「前にあらわれる」，「起こる」という意味になる。又，形容詞と結ばれる場合，「なる」という意味であって，しかも主として，正常な状態からのある下降又は何らかの意味でより悪い状態への移行を意味するような「生成」をあらわす。

名詞や形容詞と用いられる場合と同様，動詞と結ばれて用いられるのも，さまざまな形式があるようだ。決まった結合が普通であって，そうでないものは普通ではない。多くの結合はそのときどきに応じて形成されたという印象を作る。説明したすべての助動詞と同様，*paṛnā* も又，動詞表現に何らかの意味での限定の意味を施すのである。

48. もとの意味に応じて，ある下降運動をあらわす動詞にあっては，この方向をより限定的に示すことが肝要なのである。それはちょうど，いつも下へ向いているにもかかわらず我々が「下へ倒れる」というようなものである。例：

gir paṛnā「落ちる，倒れる」；*kūd paṛnā*「下，又は中へ飛び込む（たとえば水中に）」；*chūṭ paṛnā*「すべりおちる」；*utar paṛnā*「おりる」；*ṭapak paṛnā*「したたる」；*jhuk paṛnā*「傾く」；*ṭūṭ paṛnā*「不意に襲う」；*umaṛ paṛnā*「波うつ」（川の流れ又は群集について）；°*par jhapaṭ paṛnā*「…にとびかかる」

49. 多くの結合において，その下降運動は本来的なものであろうが，しかし決してそれが使用されるどんな場合にも現れていることはない。*paṛnā* の意味はひじょうに拡大されていて，運動をあらわすある種の動詞にあっては，*paṛnā* は単に運動の行為を強めるのに役立つだけである。これによって *paṛnā* は，一般的にあらゆる場合に（たとえば，*ṭūṭ paṛnā* における如く特別な意味が存在する場合を除いては）*jānā* と競合することになる。KĀMTĀPRASĀD GURU は，*paṛnā* は大てい *jānā* と同じ意味だとはっきりいっている（398頁）。それでも，しばしば両者に，

微妙な差異の存在することも確かなのであるが，それをつかむのは困難である。*Śabdasāgar* がいうように，*paṛnā* は突然性（*ākasmikatā*）の概念を示すということは，多くの場合にあてはまるし，又，*Śabdasāgar* で *sąyog* といい，KELLOGG で *chance*（260頁）といっているように，それが偶然性を表わすということも，これからすぐ我々の観察しようとしている一連の動詞については，確かに正しいことである。しかしながら，文法で示されたどの定義も該当しない動詞が多く残っている。恐らくは，若干の場合の結合は純粋に慣習によるものなのだろう。*paṛnā* は「接近」（*približenije*）を示す，との BARANNIKOV の説明（136頁）は不明瞭である。

運動の動詞と *paṛnā* がひじょうに頻繁に結ばれるのは *cal paṛnā* である。*cal paṛnā* とは，何かある具体的な動きに関連した場合，一般に，「先へ進む」又は「前進する」あるいは又，「遠ざかる」という意味での「出発する」ということである。

usī vaqt ek yuvatī khet se niklī aur muḥ chipāye, lągṛātī, kapṛe sąbhāltī, ek taraf cal paṛī（Pr. *Karmbhūmi* 25頁）「その瞬間，一人の少女が畑から現れ，顔をかくしながら，びっこをひきつつ，着物をしっかりもって，一方へ立ち去った（ある方向にさらに進んで離れて行った）」

jahą̄ un kī aprameya śakti…ko vyakt hone kā avasar milā ki…suvistīrṇ niṣkaṇṭak path dīkh gayā tathā kṛtajñatāpūrṇ hṛday se Prabhu ke caraṇo mę sir navākar ham gantavya kī or cal paṛe（*Satsaṅg-sudhā* 6頁）「彼の（神の）無限の力…をあらわす機会を得るやただちに…まっすぐ広がった，遮えぎるもののない道がみえてきた。そして，感謝に満ちた心で神の御足に頭を垂れて，私達は目的地に向って出発した」

しかし比喩的な意味でこの結合が用いられることがひじょうに多い。

ājkal yah ullī prathā cal paṛī hai（Pr. *Sevāsadan* 156頁）「この頃こんな逆の風習がはやった」

bhakti-āndolan islām ke āgaman se pratham hī cal paṛā thā「バクティ運動は回教徒の来る以前にすでに広まっていた」

us kī sajīvatā is naye mārg par cal paṛī（Pr. *Sevāsadan* 276頁）「彼の快活さは新しい道（活動）へと向った」

is prakār karm se śarīr aur śarīr se karm kī paramparā cal paṛtī hai[1]「かくして，業から肉体がそして肉体から業の流れがでてゆくのだ」

Lakhnaū ke ek dhanī parivār se bātcīt cal paṛī（Pr. *Karmbhūmi* 7頁）「Lucknow のある金持の家族と（結婚）話がはじまった」

---

1 *Śrīmadbhāgavatamahāpurāṇam* 7, 7, 47 (sacitraṃ sarala hindī-vyākhya-sahitam). Khaṇḍa 1—2. Gorakhpur: Gītā Press. 2版. sąvat 2008.

上述の例から，ここで *paṛnā* の機能を定義するのが困難であることが分る。多くの使用は慣例によるところが多いようだ。具体的に使用される場合，*calnā* の意味から，遠ざかるという要素をより多く表現する *cal paṛnā* とは反対に，*cal denā*（その外では，具体的な運動にのみ関連ずけられているように思える）はむしろ動き出すこと，つまり運動の開始について指示する。

しばしば *paṛnā* と結ばれるその外の運動の動詞は *nikalnā*「出る」，*lauṭnā*「戻る」，さらに *uchalnā*「はねる」である。比喩的な意味で *paṛnā* の現れる結合は °*mẹ juṭ parnā* 及び °*mẹ lag paṛnā*「没頭する，没入する」である。これらの結合も又，多少共，慣用的なもののように思われる。だから，*jānā* 又は *ānā* との，等しく可能な結合の差異は定義しにくい。若干の場合（しかし，つねにそうではない）*paṛnā* の合成語は意外性の意味をもっている。

50．一連の合成語の場合，名詞と結ばれてあらわれた意味，「起こる，生じる，現れる」から出発すべきである。*paṛnā* によって表わされる，起こるということは，ひとりでに，偶然に，不意に，しばしば突然に起こるということである。すなわち，それはしばしば変則的な何か，存在すべからざる何かが起るということである（それ故，又，ひじょうに慣用的に用いられるときは，主語又は述語名詞をとらずに，*paṛnā* は不幸，困窮又は病気を示すことができる。例：*paṛī hai un par*; *ve bhī paṛe*）。この関係に属するのは，*bhūl paṛnā*「道に迷う」であり，さらに又，ひじょうに頻繁なのは *ā paṛnā*「現れる，突然入りこむ，…に落ち入る」である。例：

hṛday par bojh-sā ā paṛā（Pr. *Sevāsadan* 104頁）は，二つの動詞 *ānā* と *paṛnā* のもとの意味が保持されるように訳せる。「いわば一つの重荷がきて，そして（彼女の）心にのしかかった」

Śvetāṅk ek ālokamay sąsār mẹ ā paṛā thā（*Citralekhā* 24頁）「Śvetāṅk は一つの光明ある世界に入ったのだった」

jāti par koī saṅkaṭ ā paṛtā（*hai*）（Pr. *Sevāsadan* 88頁）「社会（ヒンドゥの）に，ある困難がふりかかる」

akāl ā paṛegā（*Gītā-Pravacan* 13頁）「危饉が起こるだろう」

prasaṅg aisā ā paṛā thā, ki vah apne ko nirdoṣ siddh karnā āvaśyak samajhtā thā（Pr. *Karmbhūmi* 46頁）「彼が自分の無罪を証明することが必要だと思うような状況になっていた」

しばしば，*paṛnā* に含まれている意味のニュアンスが，副詞によっても重複的に表現されることがある。

kām itnā āvaśyak aur acānak ā paṛā thā（*Citralekhā* 24頁）「問題がかくも不可避的に又，急にやってきたのだ」

mere jīvan mẹ tum bavaṇḍar bankar ekāek kyẹ ā paṛī（*Citralekhā* 27頁）「私の人生に，お前は嵐のように突然何故踏み込んできたのか」

外の動詞の例：

jā paṛnā「ふとやってくる」

(*us*) *ke netra svayam hī Viśāladev kī or ghūm paṛe* (*Citralekhā* 87頁)「彼の目は自ら，Viśāladev の方にそそがれた」

(*us*) *ke mukh se acānak hī nikal paṛā ‚nahī‘* (*Citralekhā* 46頁)「突然彼の口から出た——いやちがう！」

bātcīt ke daurān mẹ ek bār Āp anāyās hī kah paṛe「会話の途中に，彼（尊者）は一度，ふと（あっさり）いってしまった」

janatā ke sahasra mukh khul paṛe「何千人という民衆の口が開いた」

tum āj dādājī se laṛ paṛe? (Pr. *Karmbhūmi* 46頁)「お前は今日旦那といい争ったのか」＝喧嘩したのか。

51. 予期されぬこと，欲せられないこと，さらには，変則的なことのニュアンスは *paṛnā* によって，次のような，おそらくもっと一般的な結合によっても暗示される。

kabhī-kabhī ham aṅgrezī prabhāv ke kāraṇ aise śabda bhī likh jāte haị, jin kā arth vāstavik āśay se bahut dūr jā paṛtā hai (*Acchī Hindī* 238頁)「時々我々は英語の影響のせいで，実際の意味からひじょうに遠ざかっているようなことばも書いたりするのだ」

このようなことばの使用が誤りであることは，*likhnā* と *jānā* の合成によって強められるし（§42参照）又，その結果が不本意ながらまちがいだらけで，異常なものとなることが，*jānā* と *paṛnā* の合成で明らかになるのである。

is tarah calne se āndolan ant mẹ pratikriyā utpanna karte haị, aur sudhār kī kośiśẹ ulṭe bigār upjā paṛtī haị (*Pūrvoday* 160頁)「こんな風なやり方をすると，運動は終局的に反動（反作用）を生む，そして改革のための努力が逆に（意志に反して——又は意外に），悪化を招くのである」

この場合の，目的語と結びついた他動詞との *paṛnā* の結びつきは珍しいことだ。

āj vah din hai ki Āp vidvān log bhī ājñā dete haị ki maị Āp ke sāmne khaṛā hokar bol paṛṇ̣ (*Sāhitya kā śreya aur preya* 75頁)「今日は，あなた方学者も，私があなた方の前に立ってしゃべることをお許し下さる日なのです」（話者の意志に反して）

彼がもたらすことは，ほんの二～三の，全く偶然の，そして彼の考えによればおそらく場ちがいのことばであり得よう。

前文のように次文の *paṛnā* においても，行為のある種のためらいを強調しているようである。

use (＝*apnī bāt ko*) *itnī ąkhọ ke sāmne ughār paṛṇ̣ kyā?* (*Sāhitya kā śreya aur preya* 289頁)「それ（私のことば）を，こんなに大勢の眼前で打明けようか」

ここでも又，目的語と結びついた他動詞と *paṛnā* が合成されている。

52. 始動又は意外のニュアンスは，気持の動き又はその発表を示す動詞と *paṛnā* の合成語の場合に顕著である。この場合 *paṛnā* は，急な反対の運動すなわち，突然の上昇運動を表わす *uṭhnā*（§57）と競合する。*paṛnā* の合成語と *uṭhnā* の合成語間の差違は規定しにくい。例：

umaṛ paṛnā「こみ上げる」（気持が）；*muskirā paṛnā*「微笑む」；*caṵk paṛnā*「驚く」；*bigaṛ paṛnā*「憤激する」；*ulajh paṛnā*「紛糾する」；*garaj paṛnā*「うなる」；*ro paṛnā*「泣く」；*jag paṛnā*「目覚める」（おそらく，とくに比喩的な意味で）；*haṣ paṛnā*「笑う」；*jhuṵjhlā*（*jhallā*）*paṛnā*「腹を立てる，不気嫌になる」；*uṭh paṛnā*「不意にきこえる」（*kolāhal* 喧騒が）

53. *ban paṛnā* は「ある結果になる」（形容詞補語と共に），「起こり得る」，「なされ得る」，「うまくゆく」（「可能である」「成功する」の意味で）等の意味である。例：

un ke Vinay ke pad to itne sundar ban paṛe haiṵ…「彼（Tulsīdās）の Vinaya の詩といえば，とても美しいものとなったのです」

pustak acchī ban paṛī hai「本はすぐれたものとなった」

apne se jo kuch ban paṛā sab karke hār gayā（Pr. *Sevāsadan* 201頁）「自分にできる事はすべてやったが（しかし），失敗した」

śām tak ban paṛā to āṵgā（Pr. *Karmbhūmi* 84頁）「夕方までに可能なら（＝うまくいくと），私は来るでしょう」

54. *paṛnā* は又，感覚動詞の場合，主体のない自然発生の意味を有する。それ故，自動詞とも他動詞とも結びつくが，合成語はつねに自動詞である。例：

dekh paṛnā「見える」（自動詞に導かれる *dīkh paṛnā* も同じ意味である）；*sūjh paṛnā*「思いつく」；*sun paṛnā*「きこえる」；*jān paṛnā*「思える」（しばしば，誤ったふうに）；*samajh paṛnā*「分る」

Erläuterungen vom Übersetzer

訳者による註

① ヒンディー語の不定詞はすべて語尾が *-nā* で終るが，この *-nā* を *-ne* 化したものを，便宜上，変形不定詞と訳した。

② 本動詞の話法（話し方）について主観的な潤色を施す助動詞を，ドイツ語で 'Modale'（話法の助動詞）といい，*dürfen, können, mögen, müssen, sollen, wollen* がそれである。

③ インド・ビハール州東北にある町。旧名 Mithila。人口約10万人。

④ しかしこの翻訳では，便宜上，はじめて出る出典については脚注で示し，既出の出典については例文ごとに（ ）内に示すことにした。

⑤ もともと，デリー，メーラット地方の方言であったもので，現代の標準ヒンディー語の母胎となったもの。方言としての「カリー・ボーリー」は言語学的には，西ヒンディー方言群に属する。なお，それを母胎として発展した標準ヒンディー語のことを「カリー・ボーリー・ヒンディー」といい，両者のちがいは「東京弁」と「標準日本語」ぐらいのものと考えてよかろう。カリー・ボーリーが散文学の手段として用いられるようになったのは，ようやく十九世紀以降のことであり，その初期の散文体は洗錬されていないものが多い。

⑥ 「それ（サンスクリット）と同一」というのは，サンスクリットからの借用語という意味で，それに対して，サンスクリットに起源を発してはいるが，ヒンディー語本来の語と同化して，借用されたものという意識を伴わない語を *tadbhava* という。ヒンディー語の語彙の大半は *tatsama* か *tadbhava* である。

⑦ 正式には Deva Nāgarī 文字といい，サンスクリット語，ヒンディー語の外に，マラーティー語，ネパール語で使われる文字である。なお，ヒンディー語にはアラビア語やペルシャ語起源の語が沢山入っており，それらに起源を発する発音のいくつかは，サンスクリットの発音にないものであるが故に，Deva Nāgarī 文字では表わされない。そこで，いくつかの Nāgarī 文字の下に点をつけることによって，こうした発音を記そうとの工夫がなされたのである。但し，今日では余り厳密に守られていない。

⑧,⑨ サンスクリットには能動態（Parasmaipada）・反照態（Ātmanepada）・受動態（Karmavācya）の三つの態があるが，Parasmaipada（parasmai は「他のために」という意）が，行為が他に及ぶことを意味するのに対し，Ātmanepada（ātmane は「自分のために」という意）は自分自身のために為す行為をあらわす。

⑩ サンスクリットの強意活用 *Intensive*, *Frequentative* を作るには接尾辞 -ya- を添えて語幹を作り，第一種活用の Ātmanepada に従って活用させればよい。その前の母音が低い階次を示すときは ya が yaṅ となる。それの表わす意味は「さかんに～する」とか「何度も～する」ということであるが，それほど頻繁には現れない。(W. D. Whitney, 'Sanskrit Grammar' pp. 362—365 参照。)

⑪ 占有の概念とは，日本語で「ただ」「のみ」で表わされるものである。

⑫ *avadhāraṇ* とは「決断」「決意」「決定」「確定」「限定」という意。又，*bodhak* は「示すもの」という意。

⑬ このヒンディー語の意味：「その行為の利益が行為者にのみ得られる動詞と共に，動詞 '*lenā*' が用いられる。」

⑭ удаление「遠ざかること」